blessing

雨音未波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｂｌｅｓｓｉｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ４２９８Ｃ

【作者名】
雨音未波

【あらすじ】
普通の女子高生が世界を救い、大切なものを見つけるお話…。それはまだ誰も気づいていないもの―…。羽ばたいて見つけるものとは一体何なのか。さぁ…歩こうか。一緒に――…。

†プロローグ†（前書き）

ラブファンタジーです！！　ぜひ読んでください。　沢山の愛が詰まっています。そしてこの物語を最後まで見守っていてください…。

†プロローグ†

ねぇ…知ってる？

“運命”って本当に在るんだよ…

それを知ったのはあなたに逢ってから……

あなたに愛されてから……

あなたがこれからも幸せであるように――私は祈ります……

だからどうか…泣かないで悲しまないで…

笑ってください…

あなたと生きられて…

良かった――…

もう一度逢えると信じて私は目を閉じます

叶う事はなくても私は信じ続けます

あなたとの明日を……

あなたとの未来を……

あなたとの……道を――……

†第一話　少女　〜1〜†

—…誰かが泣いている…。誰…？其処で泣いているのは誰なの…？

「——…待っていました…巫女……」

えっ…？巫女？

「どうか皆の想いを聞いて…世界を—……お願い…」

…何言ってるの？ねぇ…お願いだから…泣かないでよ—…痛いよ——…。

——…

「……こ…亜子…」

「んン…？」

「亜子！起きなさい！」

「…！」

えっ…。

「やっと起きた…まったく。学校に遅れるわよ?早く支度しなさい」

「……」

夢…でもとてもリアルな夢だった…。

亜子と呼ばれた少女はゆっくりとベッドから起き上がった。
今見ていた夢を理解しようと頭を働かせようとした時…。

「亜子!!ぼーっとしてないで早くしなさいっ!」

「はぃぃ!!」

母親の雷が落ちた。

亜子は急いで準備をし、朝食を食べ、玄関へと向かった。
これがいつもの日常。

「行ってらっしゃい、亜子」
「行ってきまーす!」

バタンと勢いよく扉を開け、閉める。

これがいつもの会話。

何の変わりもない日々だが、亜子は夢で見た事が気になっていた。

何だったんだろう…あの夢…。
疑問に思いながらも、走る足は止めない。
もう遅刻ギリギリだったからだ。
「あまり深く考えなくてもいいよねっ」
そう言うと全力疾走で駆けて行った…。

――――…

「亜子！おはよ！」
亜子は持ち前の足の速さのお陰で遅刻せずにすんだ。
教室に入ろうとしたらとても明るい声が亜子の名を呼んだ。
振り返ると其処には、綺麗な黒色でストレートの髪を持ち、長さは肩ぐらいまである少女が挨拶してきた。
「おはよ麻希！」
亜子の親友の麻希。可愛らしい女の子だ。
「ちょっと聞いてよ！あのねまっくんがぁー…」
まっくんとは麻希の彼氏の事。
麻希は恋愛経験豊富で、恋多き女。しかし純粋で真っ直ぐなの。
あたしはそんな麻希が大好き。尊敬してる。

あたしはと言うと…。

茶髪のロングストレートで周りからは何故か可愛いと言われる。
自分はこんな顔ブサイクだと思ってるんだけど、そんな事ないらしい（麻希談）

本人自分が美人という自覚無し。

「でっ！あたしそんな事思ってないのにー！…」

隣ではまだ彼氏の事に文句言ってる麻希。
まぁまぁと宥めて二人は教室に入った。

こんなあたしの日々。

またいつもの日常が始まる…。

†〜2〜†

教室ではクラスのみんなが騒いでいた。
あたしは自分の席に鞄を置いて、前の席の麻希に話しかける。
「麻ー希！いつまでも膨れてるな！」
ぽんぽんと麻希の頭を叩いてやる。
麻希はまだ愚痴っていた。
「だって亜子！絶対に悪いのはまっくん何だよ！？なのになーんであたしが責められなきゃいけないの！？」
「可愛い子程苛めたいってやつじゃない？愛されてる証拠だって！」
「えっ…」
麻希の顔が赤くなる。
続けて亜子は言った。
「愛されてるから些細な事でも怒っちゃうんだよ。だから早く仲直りしなよ？」
麻希がぷくっと頬を膨らませる。納得してない様子。
でも麻希の事だ。もう怒ってない。親友のあたしには良くわかる。
「ほんと…？大丈夫かな？」
上目遣いで亜子を見てくる。亜子は笑顔を頷いた。
それを見た麻希はパアッと顔を輝かせる。

「そうだよね！うん…ありがと亜子！仲直りするっ！」

「いいえ、良かった」

麻希はゴロゴロと猫の様に体を擦り付けてきた。
あたしはそれを返す様に麻希を抱き締める。

そんな二人を見たクラスのみんなは、あたし達を囃し立てる。
お構い無しに二人はずっと抱き合っていた。

するとチャイムが鳴り、皆それぞれ自分の席につく。
あたし達も離れ、席についた。
そしたら隣の子があたしに話しかけてきた。

「二人共愛し合ってるね！」
あたしは笑顔で答えた。

「うん！超愛し合ってます！」
言った途端、頭に何か衝撃が…。

結構痛かったぞ！麻希！

麻希は後ろを向いて亜子の頭の上で拳骨を作っていた。顔が真っ赤になっている。

照れちゃってーっ、可愛いな！

あたしと隣の子と笑い合う。麻希は真っ赤な顔のまま前を向いた。

…ずっと続けばいい。
楽しいから…誰も邪魔しないで…。

思っていたのに…それは一瞬で崩れ去るんだ―…。

†〜3〜†

いつも通り1日を過ごして、あたしと麻希は放課後街にやってきた。
麻希が買い物したいと言うので、あたしは付き合った。
やってきたのは雑貨屋。
見た目可愛い感じのお店だ。
二人は中に入り、見て回る。
「麻希、何買うの？」
訪ねると麻希はくるっと振り向き、手には可愛らしいネックレスを持っていた。形はハートだ。
「あっ可愛い！」
「でしょ？」
白い歯をにひっと出して、自分に当てる。
「どっ？似合う？」
「似合ってるよ！可愛い！」
「ほんと！？やっぱ買おうかなぁ…」
「買いなよ！あたしも欲しいから買う！ネックレス！」

「うん！買おう！えっとね…亜子に似合うのは…」
麻希はあたしに似合うネックレスを探し始めた。
あたしも探す。
ゆっくり物色していくと…とても目に焼きつく物を見つけた。
それは虹色の水晶玉のようなものが二つ横に付いているネックレスだった。
「これ…可愛くて綺麗…」
あたしはそのネックレスを手に取った。
透き通る程の色。あたしは目が離せなかった。
「何々どれー？」
あたしの言葉に気づいた麻希はネックレスを見る。
「あっ綺麗なネックレスだねー！亜子に似合いそう！」
「そかな…」
つい照れてしまった。
「そうだよ！それにする？」
あたしは考え込んだ。お金は無いけど…欲しい。
そう思い買う決心をした。
麻希はさっきのハートのネックレスを買うらしい。

そしてあたし達はプリクラを撮りにゲーセンに行った。
撮り終わり、二つに分ける。
もう暗くなってきていて、時間は7時を回っていた。
あたし達は自宅に帰ろうと家路に向かった。

そして麻希と別れて、自宅に到着する。

ガチャ…

「ただいまぁ」

家に入ると同時にいい匂いがしてきた。

この匂いは…。

「お帰り亜子。遅かったわね」

リビングから顔を出してあたしを迎えてくれたのは母。

しかしあたしはそんな母に少しの怒りを与える。

「お母さん…この匂いって…」

「えぇ！昨日と同じカレーよ！」

ガッツポーズをし、そのまま奥へと入って行った。

あたしは肩を落とし、がっくりした。

…またカレーなのね…。

今日で何日目のカレーだか…。

暗い気分のまま、あたしは自分の部屋へと向かった。

まだ始まらない…それは―…。

†～4～†

あたしはもう飽きてしまったカレーを両親と食べ、部屋に戻った。

――――…

「はあぁ…」

あたしは深いため息を吐いた。

カレーはもういいよ…。

亜子の頭の中はカレーでいっぱいだった。

何か別の事を考えようと、今日買ったネックレスを思い出す。

鞄からネックレスの入った袋を取り出し、中身を取る。

中からは虹色の綺麗な玉のネックレスが出てきた。

亜子はそれを首にかける。

「…綺麗だな…」

それを見ながら電気にかざしてみる。

反射して余計綺麗だった。

うっとりして見ていると…突然玉が光りだした。

「!?えっ!」

な、何!?玉が光った!

わたわたと慌てて、首からネックレスを取ろうとした。

その時―…。

放っていた光りが亜子を包んだ。

「え…!?」

光りは強くなり、亜子を呑み込む。

「ちょっ…やだ!お母さん!お父さん!麻希…っ…」

声は消えていき…光りは段々と弱まっていった。

そしてゆっくりと消えた…。

…部屋には誰もいなくなり、静かな空間が広がった―…。

――…さあ、始まるよ。

運命の物語が――…。

静かに廻りだす…運命の糸は…ゆっくりと絡まり、ほどけない。

もう…戻れない…。

――――…

「亜子ー、お風呂入ってー、亜子ぉ？……返事がないわね…寝てるのかしら…」

「あぁいいよ、私が入ろう」

「ごめんねあなた。全くあの子ったら…」

母親は階段を降りて行った。

……気づかない。存在が消えた事に…まだ気づかない――――…。

†第二話　異世界に降り立ち少女　～1～†

――――…

「――――…ン…。――――…ぁ…」

亜子はゆっくりと瞼を開ける。そこで何かが聞こえてきた…。

「目を覚ましたか」

…横から男の声…。ゆっくりと声のした方へ振り向くと……。

「…！！きゃあぁぁ！！」

つい大声を出してしまった。だって…だって…！

「悪い、驚かせたな」

「…！！」

何で！？何これっ！！

亜子が見つけたのは…。

銀髪の、瞳が青い美少年だった。

顔はよく整っており、そこいらの芸能人よかかっこ良い。

亜子は一気に顔を赤くする。
ひえぇぇ！！何がどうなってるの！？
どちら様ですかこの人！！
「…！」
亜子は何かに気づき、瞳を見開かせる。
「…お父さんとお母さんは…？」
「え…？」
青年は首を傾げた。
亜子は青年に問いただす。
「ねぇ…何が起こったの？此所は何処？何で…」
状況について行けず、困惑する亜子。
そんな亜子を見た青年は、安心させるように優しく語りかけた。
「…あなたは、俺達が仕事の途中に通った草原で倒れていたんだ」
「え…」
不安な瞳を青年に向ける。
…倒れ…？あたし…どうなったの？
確か自分の部屋に居て、カレーが頭から離れなくてうなだれて…。
それから…。

……ネックレスを見てた…。
綺麗で、首にかけてみて…、それで……。
…ネックレスが光ったんだ。眩しくて…目を瞑って、気がついたら
…此所に居た。
…どういう事？あたしに…何が起こったの？
意味分かんない…。
「…！」
ばっと首にかかっているであろうネックレスに目をやる。案の定、
ネックレスは亜子の首にかかっていて、キラキラと輝いていた。
「…どうして…」
亜子はネックレスを握った。
訳分かんないよ…。
「…麻希…お父さん…お母さんっ…」
亜子はネックレスに語りかけるように名を呼んだ。
…あたしは何処に来ちゃったの…！？
…それまで黙っていた青年が亜子に話しかけた。
「お前は…何処から来たんだ？」

「！！」

亜子はぎょっとした。

…言っていいのか…こんな事…信じてくれるの？

……ううん、信じてくれる訳ない。

だったら話さない方がいい…。

―…でも…気絶しているあたしを助けてくれて、こうやって側に居てくれる。

きっと悪い人じゃない。なのに…話さないで、あたしは…。

…どうしよう…。

「どうした…？」

「っ…」

ガチャ…

「！」

いきなり扉が開く音がして、そして其処から一人誰かが歩いてくる。

「…おや、目を覚ましましたね」

「…！」

それは…とても綺麗な青年だった。
金髪で瞳はグリーンの美少年。
椅子に座っているこの人と同じくらい…美形だった。
亜子はつい固まってしまう。

こんな美少年を…しかも二人も見た事がなかった…。
驚いて声も出ない。

そんな亜子を見て、次に金髪の青年は銀髪の青年に目をやった。

「…何かしたんですか？」

「…は？」
「…え？」

あまりの問いかけに銀髪の青年と声が重なってしまった。

金髪の青年は怪訝そうに銀髪の青年を見つめている。
「だってこの方固まっているものですから、あなたが何かしたのかと思ったんですけど…違いますか？」

「違う！！」

銀髪の青年は声を張り上げ否定の言葉を言う。

「何故そう思うんだ！俺はそんなにやばい奴に見えるか！？」

「えぇ見えます」

うわっ！ずばっと言っちゃったよこの人！

横目でチラリと銀髪の青年を見ると、微かに肩が震えていた。

「……」

あたしは黙るしかなかった。

†〜2〜†

まだ言い争いは続く…。

「お前は今まで俺の何を見てきたんだ！？おかしいだろ…」

「冗談ですよ、いやですね本気にするなんて」

ぴくっ…　　「っ…、…お前は…」

銀髪の青年が鋭い瞳で金髪の青年を睨んだ。

あたしにとってはもの凄い怖い顔なのに、金髪の青年は全く怯えていない。

…さすがです。

つい感心してしまった。

「まぁそれはいいとして」そう言うと金髪の青年はあたしの方を向き、軽く礼をした。

「すいません、この様なものを見せてしまって…」

「い…いいえ…」

「紹介が遅れましたね、私は旒來（りゅうく）と言います。こちらは十夜（とおや）です」

にっこりと旒來という青年はあたしに微笑んできた。

それにつられてあたしも笑ってしまう。

「あなたの名は？」

そうだった！

つい忘れてしまった…。

笑顔に気を取られて…。

「あたしは亜子です」

「亜子さんですか、あの…聞いてもよろしいですか？」

「あのっ！」

訊ねられた瞬間にあたしも口を開く。

こっちだって聞きたい事あるの！多分そっちより沢山あるとっ…思う…。

旒來さんはあたしの威圧に少し後ずさる。あたしは気にせず問いただす。

「此所は何処ですか！？」

今まで一番気になってた事を聞いた。

いきなりこんな所に来ちゃって、周りは知らない場所で、混乱するっつの！

旒來は少し戸惑っていたが、次には冷静な顔になってあたしを見つめた。

「此所は…」

旒來が話そうとした瞬間…。

ブー…ブー…

えっ！？

制服に付いてるポケットが震えた。

…そうだ…。携帯があったんだ！！

大きな期待を胸に、急いでポケットから震えている携帯を取り出した。

着信…麻希から！

不思議な顔をしている二人には構わず、電話に出る。

「麻希！？」

†〜3〜†

あたしは大声で麻希を呼んだ。

「きゃっ！びっくりしたぁ…どしたの亜子？」

知り合いの声にあたしは安心し、瞳に涙が浮かんだ。

良かった…。

「それよりさ亜子！聞いて！？」

「聞いてはこっちだし！！」

「へっ？」

麻希はまぬけな声を出した。けどあたしは気にせず麻希に訴える。

「変な所来たぁ！！」

あたしの声は涙声だった。

聞いた麻希は驚いた。

そりゃそうです。いきなりこんな事言われたらねぇ。

「変な所？何それ…」

「ほんとだって！気づいたら違う部屋に居てっ見た事ない人達が居て！でも名前は日本人っぽいし！此所何処なの！？助けてよ麻希ぃ…」

「……落ち…ょ…亜…」

何だか聞こえが悪い。電波が途切れ途切れなのだろう。段々と声が聞こえなくなってきた…。

「ちょっと麻希！麻希！？」

プツッ…

「ぁ…」

ツー…ツー…ツー…

「…切れた…圏外になっちゃった…」

あたしはがっくりと肩を落とした。

…もぅ…何で…。せっかく麻希が電話くれたのに…。

そういえば麻希…何か言いたそうだった。何だったんだろう…。圏外になっちゃったから電話出来ないし…。

はぁ…。

何もかもが嫌になった。

落ち込んでる亜子に、今まで黙って見ていた旒來が話しかけた。

「亜子さん」

「ふぇっ？」

亜子は突然声を掛けられ、まぬけな声が出たがすぐに旒來の方を向いた。

「最初からお話します。混乱している様なので…いいですか？」

「あ…はい…」

携帯をポケットにしまい、話を聞く姿勢になる。

準備が出来たと悟った旒來は優しく微笑んで、静かに口を開いた…。

†〜4〜†

「…此所は…あなたが思っているような場所ではありません」

「…ぇ…」

どういう…意味？

理解出来ず頭上に？マークを付けていると、旒來が話を続けた。

「きっと驚くと思います。此所は…」

「日本じゃないの…？」

「…えぇ…」

「！じゃあ此所は何処ですか！？」

涙で潤んだ瞳を旒來に向けた。そしたら旒來の隣に座っていた十夜が口を開いた。

「此所はヴェリエス国と言う」

…ヴェリ…何？ヴェリエス国…？聞いた事無い国名…外国なのかな…。

「外国なの？」

「嫌…違う。この世界に在る一つの国だ。他にも国が在って、此所

はその中の一つだ」

…えっと…え？てことは此所って…まさか……。

「お前の様な服装は見た事がないんだ。だからもしかしたらお前は…」

「……此所…異世界…？」

二人は黙ってあたしを見て、深く頷いた。

…異世界…ってあの漫画とかである様な場所でめちゃファンタジーな…あれ！？嘘でしょ！？あたし異世界に来ちゃったの！！？

「嘘だぁ…あり得ないでしょ…だってあたしは普通の女子高生で、異世界何て夢の様な場所…」

「本当だ」

十夜が真面目な顔で答えた。あたしは真っ青になった。今にも倒れそう…。

あり得なすぎ…こんな事あるんだ…。

ちょっと感心してしまった。

でもここで疑問が出た。

「待って…どうしてあたしが異世界に来ちゃったの？何の理由があって？」

「それは…分かんねぇ…」

何故か十夜も困惑していた。顔が暗い。

何で？

沈黙が流れてしまった…。…それを旒來が破った。

「十夜」

呼ばれて十夜は旒來を見る。

旒來は微笑んでいた。しかし十夜はすぐに視線を逸らす。

えっ？何これ…。

「…何だよ」

十夜の声は怒った様な感じだった。しかし気にせず旒來は先を続ける。

「あなたにはやるべき事がある。守護者として…そしてそれに選ばれたのは十夜…あなたです。分かっていますね？」

「…あぁ」

ぶっきらぼうに返事をし、旒來の目を見る十夜。

あたしはこのやり取りが理解出来なかった。

ただ黙って二人を見ている。

†〜5〜†

二人の会話は続く…。

「なら分かっているでしょう。亜子さんがどんな存在か…そして…
…首にかかっているネックレス…」

チラッとあたしの首にかかってるネックレスを旒來は見た。
しかしすぐに視線を逸らす。

何？このネックレスに何かあるの？
話について行けないぃぃぃ！
「…あのネックレスは、サクヤ様から受け継いだ物…、虹色の水晶玉…なら彼女は…」

あたしはこの言葉にカチンときた。少しね…。

「ちょっと待ってよ！」

すぐに旒來に向かって叫んだ。
だって黙ってらんない！
このネックレスは…っ！！

「このネックレスはあたしの全財産使って買ったネックレスだよ！
そのサクヤ？とか言う人から貰ってないからっ！勘違いしないでよ
！！」

いきなりの大声に二人はあたしを見て固まってしまった。

でも納得出来ないんだもん！これはあたしが迷いに迷って買ったやつなのに！それを貰った！？ふざけんな！ならあたしの全財産がパァじゃんっ！！貰ったって言うならあたしの金返せ！！！

…ぁ…あれ？何か変な方向に…。…まぁいいよ！！

「とにかく！！これはあたしが買った物ですっ！分かった！？」

疲れて肩で息をしているあたしに、二人はまだ固まったまま。

でもいいの！言う事言った！満足！！

…けど、サクヤって誰？

また疑問が出来て、聞こうと二人に話しかけようとしたが…。

あたしのさっきの文句に放心状態の二人…。

…何か話しかけづらい…。てか怒っちゃったし、居づらい…。どうしよう…。

さっきの文句を反省し、体を小さくして下を向いた。

それに気づいた十夜がフッと笑い、優しくあたしの頭を撫でてくれた。

「泣くなって、俺達が悪かったよ。だからもう泣くな、なっ？」

優しい声…泣いてないんだけどな…。

…でも…興奮してたから少し落ち着いた。ちゃんと状況を理解しよ

う。

「…ん…ありがと十夜さん」

あたしは頭を上げた。十夜は笑ってると思ったんだけど…。

何故か驚いた顔してる…何故？

「俺達年近いだろ？多分。なのにさん付けいらねーよ。十夜でいい」

ぁ…だから驚いてたんだ。成る程…。

「あたし１６だけど…」

「何だ、同じじゃん。ならお互い呼び捨てな」

「ぅ…ぅん…」

「よし」

十夜は満足の顔をしていた。そして笑った。

その笑顔は、幼い子供の様な笑顔で、とても優しそうだった…。

…可愛い…。

思ってたら顔が熱くなってきた…。あたしは気づいて両手で顔を覆う。その行動を不思議に思った十夜は、あたしの顔を覗いてきた。

「どうした？具合悪いか？」

「ちっ…違…」

必死で顔を隠す。そしたら上からクスクスと微かな笑い声が…。

「…何笑ってんだよ、旒來」
十夜は笑ってる旒來に気づき訊ねた。旒來は未だ顔に笑みを残し、十夜の問いに答える。
「いえ…何でもないです、すいません」
そしていつもの優しい表情であたしを見た。
「亜子さん、話の途中でしたね。続けましょう」
「ぁ…はい」
あたしも顔の赤みを取り、二人に向き直った。
「では初めから…」

†〜6〜†

「―…この私達が居る世界をヴェリエスと言います。そして私達が住んでいるここは…ナルスト国と言います」

「へぇー…」

初めて聞く単語だ…やっぱり異世界なんだなぁ…。

改めて思い知る亜子を他所に、旒來は話を進めて行く。

「あなたが異世界からやって来たという事は、この世界が危ないという事になります」

「…危ない？」

「はい…この世界の支えが無くなり、崩壊しようとしてるのです」

「……」

あまりの事の重大さに、あんぐりした。開いた口が塞がらないとはこういう事なんだと知った。

「この世界には、このヴェリエスを支えている巫女が居るのです。それが先程言った…サクヤ様です」

「成る程…じゃあ今サクヤさんは此所を支えて頑張ってるんだね…」

「そうです…。―…しかし、サクヤ様の力だけでは崩壊を防げなくなったんです」

「え？」

それって…やばいよね。
崩壊したらこの世界無くなっちゃう…。

「だから……此所にあなたが居るのです―…」

真剣な眼差しをあたしに向ける旒來さんに、あたしは戸惑った。

「あたし…？」

亜子は自分で自分を指差す。

旒來は大きく頷いた。

「あなたが…巫女と、この世界を支えるのです。その為にあなたは此所に呼ばれたんです」

…あたしが、世界の崩壊を防ぐ…その為に呼ばれた…。…ぇ…ちょっと待って。

「あたしにそんな力無いけど…世界を支える力なんてそんなの…」

「いいえ、あなたには力があります。その証拠が…」

スッとあたしの首にかかってるネックレスを指差す旒來さん。

「その…ネックレスです。付いている水晶玉はサクヤ様の力の源である水晶の欠片です。その水晶に選ばれたのです。亜子さんは…」

「…えぇぇ？」

選ばれた？あたしが？逆だよ、選んだのあたしだけど…。可愛くて、欲しくて買った。

…でも…それもこのネックレスの力だったなら…。
ネックレスがあたしに買うようにしてたなら…。

—…あたしは選ばれたんだ。サクヤさんに…水晶に選ばれた…。

じゃああたしは——…世界を救う為に此所に来て、サクヤさんと一緒に護るんだ。
この世界を——あたしが……。

…何か実感湧かないし。
あたしが世界を救う勇者？
笑っちゃうよ。うん…笑っちゃう。

平凡に生きてたあたしが…異世界に来て世界を救う。夢じゃない…、現実…。

…そっかぁ。何か照れるな。

「…へへっ」

「亜子さん…？」

「亜子、どうした？」

突然笑い出した亜子を不思議に思い、二人は首を傾げた。
そんな二人など気にせず、笑う亜子。

「あははっ…ごめんね、何か可笑しくなっちゃって…。いいよ、あたしやる」

「「えっ？」」

二人は同時に声を上げた。目を見開いて驚いてる様子。

そんなに意外？

そんな事を思いながらも、あたしは頷いた。

「うん、何か面白そうだしっ世界が崩れるなんてやだもん！だからやる！」

二人は顔を見合せ、またあたしを見た。

そして二人共優しく笑いかけてくれた。

その笑顔に…胸がトクンと鳴った。

本当に優しい笑顔。それがあたしに向けられてると思うとドキドキした…。

…変なの。二人がかっこ良いからだよね。うんっ。

勝手に一人納得し、ネックレスを見る。

キラキラと水晶玉が輝いている。

……これからどうなるか分からないけど…早く帰りたいけど…でも…。

放っとけない。だってみんな…あたしを待ってたんでしょ？

だったら…あたしやるよ。

やってみる。

やってやる！！

どんなに大変でも…。

あたしは…光り輝く水晶玉に誓った――…。

――こうして、世界を救う少女が誕生した。

少女はまだ知らない。

これから……どんなに危険な事が待っているか…。

……まだ…知らない――――…。

†第三話　交差するモノ　～1～†

何か…凄い事になっちゃったな。
あたしが世界を救う者かぁ…。
そんな事あり得ないと思ってた。
てか異世界がほんとに存在してた事にびっくり。
…これから…どうなるのかな。
あたし…ちゃんと出来るといいな。この世界を救って、それで…みんなに自慢する！あたしは世界を救ったんだぁってねっ！
何て…信じる訳ないけど。
とにかく！！
頑張るよ。
…てか疑問に思ったんだけど、あたしがこっちに居る事みんな知らないよね。
学校…どうなるんだろう。
いやその前に！
お父さんとお母さん心配するよね、突然居なくなって。どうしよう…。

……まぁどうにかなるか。学校行かなくて良くなったし、授業も出なくていいし、テストも無い！

せっかくこっちに来たんだから、楽しもう！！

――――…

「あなたっ！！あなたぁ…！！」

亜子の母親がバタバタと廊下を駆ける。

勢いよくリビングの扉を開け、新聞を読んでる亜子の父親の元へと走った。

「どうした？そんなに焦って」

「ぁっ…あなたっ…っ…」

母は肩で息をし、目を見開かせて父に叫んだ。

「あなたっ！！亜子が居ないんです！！」

「…え？」

バサッと新聞を畳み、横のテーブルに置く。

そして母を落ち着かせようと肩を掴んだ。

「落ち着け母さんっ亜子が居ないって…どういう意味だ？」

「っ…お風呂に呼びに部屋に行ったんです。そしたら…中には誰も居なくてっ…！」

「何だって！？」

「何処に行ったの！？置き手紙も無くてっ…もしかしてあの子、家出…！？」

「家から出た音はしなかっただろっ？家出じゃない。家の中は探したか？」

「ぇ…ぇぇ…、でも居なかったのよ…っ…何処に行ったの…？亜子…っ」

「っ…亜子の友達の家に電話してみよう。もしかしたら何か知ってるかもしれない」

「…分かったわ…」

ふらふらしながら電話の所へ向かい、亜子の友達の家の電話番号を探す。

父は家の中を探し始めた。

「亜子…何処へ行ったんだ？」

…知る筈もない。いや…、一生知る事はないだろう。

異世界に居るなど――…。

†〜2〜†

「えぇぇえ！？十夜この国の皇子なのぉ！？」

「そんな驚く事かよ？」

「驚くよ！だって皇子って…」

新事実発見だ！十夜が皇子だった！

時間は夕方…あれから他愛もない話を三人でして、楽しいお茶会をしてました。

その時に聞いた事実！

なんと十夜が皇子だった！！

びっくりだよ…。

「てかごめんね！皇子なのに呼び捨てとかしちゃって！」

「全然いいって。皇子とかで畏まられても嫌だし、気楽がいいし」

十夜は紅茶の入ったカップを持ち、啜った。

あたしはクッキーを口に挟んでいた。

びっくりしすぎてクッキーが割れちゃったんだよね。すぐ拾ったけど。

「そっかぁ、そういう考えもあるよね」

皇子か…日本で言えば総理大臣だよね。

凄いなぁ十夜。

「ぁってか旒來さん！」

「はい？」

旒來さんは足を組み、片手にカップを持つ姿勢だった。とても似合う格好。

…って違くて。

あたしは頭を振り、本来の目的を話す。

「あたしはこれからどうすればいいんですか？」

「…どうすればとは…これからの事ですか？」

あたしは紅茶が入ってるカップをお皿の上に置き、両手を股の上に置いた。

「はい。救うって言っても何したらいいか分からないし…此所の事全然分かんないから…教えて欲しくて…」

旒來もカップを置き、にっこりと笑顔を亜子に向け、話し始めた。

「あなたには…行ってもらいたい場所があるんです」

「何処ですか！？」

旒來の顔は変わらずにこにこしていたが、少し不安そうな思いを秘めていた。

そんな事に気づく筈もない亜子は、先を急がした。

「あたしは何をしたらいいんでしょう！」

「……此所から飛んで、境界に行ってください」

「…はい？」

それって…。

「女神様が居る教会ですか？」

「違います」

うあ！違うんだ…。

じゃあきょうかいって…。

「境界と言うのは、世界に引かれている線の事を言います。その場所に試練の間という部屋があるんです」

「ふんふん…」

「試練の間にはサクヤ様が使われている水晶玉の分身が置いてあり、それを珠玉と呼びます」

「はい…」

「その珠玉に、亜子さんの力を入れてきて欲しいんですよ」

……ぅん？どういう事…？

「…えっと…つまり、あたしに試練の間に行ってもらい、そこにあ

る珠玉にあたしの力を…。…力！？」

「はい」

はいって！そんなにっこにこの顔で言われてもっ！

「その分身に力を入れると、珠玉が力を放ち、少しだけですけど均衡が保てます。サクヤ様自身が行けないので、選ばれた亜子さんに行ってもらいたいんですよ。それがあなたにやってもらう事です」

「はぁ…」

何だか…大変そう…。

それに力って…あたしに出来るのかなぁ。

「なるべく早めに行ってもらいたいんですけど…でも其処は危険なんですよね…」

「危険？」

俯いてた顔をまた上げる。旒來は少し困ったような表情をしていた。

「魔物が出ますし…」

「まっ…魔物！？」

亜子は勢いよく立ち上がった。幸いその影響で椅子が倒れる事はなかった。

今の亜子の様子だと、椅子が倒れても気にしないと思うけど…。

「魔物です」

いやいや魔物ですってにっこり微笑みかけられても！
…またファンタジー用語が出たよ…。

今度は魔物ですか…。
危険すぎるよ…、あたし普通の人間ですよ？
絶対やばいと思う。

ガックリと肩を落とした亜子を見て、旒來は安心させようと言葉をかけた。

「大丈夫ですよ、そんな心配しなくても」

何を根拠にそんな事言えるんですか…。

亜子はうなだれてしまった。

そんな亜子の隣に、今まで無言で座っていた十夜が何かに気づいたように眉をピクリと動かした。

それにすぐ気づいた旒來は、真剣な顔で十夜を見る。
「十夜…この感じは…」

「あぁ…何か強い気を感じる」

鋭い瞳を辺りに泳がす十夜。旒來もそれに倣う。

二人は立ち上がった。

急な二人の態度に、亜子は動揺してしまった。
交互に二人を見る。

そして…。

二人はある一点を見つめた。
亜子には何がなんだか分からなかった。

†〜3〜†

亜子も二人が見つめている一点を見る。

瞬間…其処が歪んでいった。

亜子はビクリと体を震わす。何かがあるとすぐに悟った。

怖くなり、身を小さくする。

それに気づいた十夜が亜子の前に庇うように立った。

「十夜…」

不安感が亜子の中を駆け巡っていく。

堪らず十夜の袖を握る。

…何か…何か嫌な予感がする。

言いようのない不安で…怖くて…。

何だろう…。

考えていると、突然歪んだ場所に穴があいた。

其処から出てきたのは…。

「…！」

あたしは目を疑った。何度も目をパチパチさせ、出てくるモノをずっと見つめた。

いや…モノじゃない。

……人だ。

人が歪んだ其処から出てきた。

女の人…。

亜子はただ見つめているしかなかった…。

そして…。

穴が跡形もなく消え、女の人がその場所に立つ。

美しい艶やかな黒髪。すらっと服から出ている細長い手足。

まるで…女神が降りてきたようだった…。

亜子はただ立ちつくしてるしかなかった。

女の人は優しい微笑みを三人に向けると、亜子に視線を移した。

一瞬ドキッとしたが、口を開く事が出来ず見とれてしまっていた。

そこで聞こえてきたのは…旒來の声。

「―…サクヤ様…」

「え…」

サクヤ…？サクヤって…。

「えぇぇぇ！！？サクヤさん！？」

この女の人がサクヤさんなの！？

亜子が驚愕していると、サクヤさんは亜子の前に立ち、白い手を差し出してきた。

とっさに亜子も手を差し出す。

するとその手を優しく握ってきた。

瞬間体が浮く感覚…。

亜子は宙に立っていた。

サクヤさんと一緒に。

状況について行けず、ただ唖然するばかりだった。

十夜と旒來も同じ。二人を黙って見てるだけだった。

きっとサクヤさんが来た事に困惑して、しかも二人して宙に浮いているもんだからかける言葉がなかったのだ。

あたしもじーっとサクヤさんを見ていた。

サクヤさんはにっこりと微笑んで亜子を見つめていた。

そして静かに口を開く…。

†～4～†

「あなたが…選ばれた少女ね…」

選ばれた少女…ぁあ！

「はっはい！」

勢いよく返事をしたら、サクヤさんがくすくすと笑った。

その笑顔がとても美しくて、見惚れてしまったんだ。

…てか、変な感覚なんだよね…この中…早く出して欲しい…。

出してくれないかと聞こうとした時…先に口を開いたのはサクヤさんの方だった。

「あなたが成さねばならぬ事は分かっていますね？」

あっサクヤさんが話しかけてきちゃった。

成さねばならぬ事って…あれだよね？

試練の間にある珠玉に力を入れろってやつ…。

「はい！分かります！」

「なら…あなたの守護者は誰？」

守護者…？って…何？

目が点になっている時、視界の隅に十夜が見えた。

十夜は自分を指さしてる。てことは…十夜が守護者？はぇー…そうだったんだ…。
てか守護者って？

「あの？」

無言になった亜子を不思議に思い、首を傾げるサクヤ。
亜子は急いで話しかけた。

「はっはい！守護者はあの人です！」

目を十夜に向ける。それに気づいたサクヤはにこっと微笑した。

「いるのですね、良かった」
「えーっと…聞きたいんですけど…」

「はい、何ですか？」

「守護者って何ですか？」

その問いに笑顔で答えてくれた。

「守護者とは、選ばれしあなたを護る人の事を言います。守護者になる人も私に選ばれ、その数は六人います。それぞれに対応する力を持っていて、選ばれた守護者はとても強い力を持っているのです。
まぁ…だから選んだんですけど」

「はぁ…」

うぅん…また小難しい話だなぁ。

「六人に選ばれた守護者の力は、炎、水、風、土、光、闇です。その内の一人があなたを護る役目を担うのです。ですがその守護者にもしもの事があれば…守護者は代わります。別の力を持った守護者に護られる事になるのです」

「もしもの事って例えば…」

「守護者が死んだり、護れなくなった時とか、戦えなくなった時とかです」

「ひぇっ」

大変だなぁ…。

「この世界は私の力と、あなたの力、そして守護者六人の力によって護られています。しかしそれだけでは駄目…私が使っている水晶の分身に、あなたの力を入れないと駄目なんです」

「はい…」

「ですが…其処がとても危険で…魔物も出ますし…」

「は…はい…」

魔物…。怖すぎ！！

「しかしやらねばなりません。大変ですけど…守護者と共に頑張ってください」

「ぁ…」

頑張るしかないよね。
あたしにしか出来ない事なんだから…。
「はいっ！頑張ります！！」
その返事にサクヤは安心した微笑みを向けた。
「あなた…名は？」
「えっ…えっと、亜子です！」
「亜子…私はサクヤです。これから共に頑張りましょう」
ぎゅっと手を握られた。
亜子もそれに応えるべく、握りかえす。
「はいっ！！」
はっきりと大きい返事をした。

†～5～†

「ありがとう亜子。あなたが選ばれて…良かった」

そしてサクヤの体が徐々に薄れていく。

「サクヤさん！？」

「私は…帰ります。また会いに来ますね、亜子……」

その言葉が終わるのと同時に、サクヤが消えた…。

そしたら急に支えを失ったように体が軽くなる。

「ふぇ？」

嘘…落ちる？

ちょっと待ってよぉぉぉ！サクヤさん急すぎっ！！

そのまま下に落下…。

痛いだろうと確信し、強く目を瞑った。

「…？」

あれ…痛みがこない…。

何故？

絶対痛いと思ったんだけど、痛くない。むしろどこか暖かかった。

恐る恐る目を開けると…。
「ひぁっ！」
びっくり！あたし十夜に抱きかかえられてた！
守ってくれたんだ…。
「ったく…危ねぇな」
ちょっと不機嫌？十夜…。
ひょいっと地面に降ろされた。
「十夜…ありがと」
あたしは照れながらもお礼を言う。
しかし十夜はまだ不機嫌なのか表情は無表情だった。
「あぁ…」
それだけ言うとすたすたと行ってしまった。
「十夜？何処へ行くんですか？」
十夜は扉に向かって歩いていた。旒來に呼ばれ、ピタッと止まり正面を向いたまま告げた。
「仕事が残ってるだろ？夕食までに片付けてくる」
そう言い残し、扉を開け去って行ってしまった…。

「お待ち下さい十夜。あっ亜子さん、この部屋はあなたの部屋ですから自由にお使い下さい。それはすぐにメイドに片付けさせます」
「は、はい」
早々と言うと、旒來も十夜を追って行ってしまった。
「…十夜、急にどうしたんだろう」
亜子は分からず首を傾げた。
…まぁいっか。十夜にだって色々あるよね。
一人で納得し、テーブルに置いてあるカップやお菓子の入った容器を片付け始めた。

一方十夜達は……。
「十夜、急にどうしたんですか？」
旒來は十夜に話しかけたが、十夜は無視して歩いて行く。
「はぁ…」
深いため息をし、旒來はただ十夜の後を追っていた…。
十夜の心情を知るのは、十夜自身と旒來だけ…。

亜子にはさっぱり理解出来ないのであった…。

そして時間は過ぎる――…。

†第四話　見上げた場所　～1～†

亜子の部屋に置かれているカップやお菓子等は、後から来たメイド達によって綺麗に片付けられた。

何かあたしが片付けてたら駄目とめちゃ注意された。でも一緒に片付けますと言ったら、何か知らないけど怒られた…。

別に怒る事ないじゃんね！

…そして…夜になり、時間は夕食の時間となった。

――――…

コンコンッ

「はぁい」

窓際に置いてある椅子に座って外を眺めていたら、部屋の扉をノックする音。

「亜子様、食事をお持ちしました」

「食事？あぁ…もうそんな時間なんだ。うん、ありがと」
それを合図に扉が開かれた。
入って来たのは、あたしと同じくらいの年の女の子だった。
「失礼します」
パタンと扉が閉じられ、食事の置いてあるおぼんを持って来て、テーブルに置かれる。
そしてあたしの方を向き、軽く礼をした。
「えっ？」
何？どしたの？
「亜子様専属のメイド、諷羅（ふうら）と申します。今日から宜しくお願いします」
「あたし専属？い、いえいえこちらこそ！専属だなんて、宜しくお願いします諷羅さん」
亜子は急いで椅子から立ち、軽く礼をした。
「諷羅とお呼び下さい」
「えっ…でも…」
「あなたに仕える身なので」
えぇ？でも悪い気がするよ…。けど年同じくらいだと思うから、仲

良くなりたいし…。てか様いらないから！

「じゃあ…諷羅って呼びます。だから諷羅もあたしの事呼び捨てで呼んでよ！」

「えっ？しかし…いけませんよ、そんな事」

「良いの！だってあたし達年同じくらいでしょ？なのに様付けいらないから！仲良くなりたいしっねっ？お互い呼び捨て！決まりねっ！」

「…亜子様…」

「様禁止！！」

「っ…私と…仲良くして下さるのですか？メイドの私と…」

「仲良くなりたいもん！諷羅と！だからメイドでも何でも関係ないっ！」

「……ありがとうございます」

「いいえっ」

仲良くなれそうな子が出来て良かった…。

こっちではあたし知り合いいないから…何か不安になるんだよね…。

諷羅が居てくれて良かった…。

「では…えっと…、…亜…子…」

「ぅん？」

「夕食テーブルの上に置いておきましたので、好きな時にお食べ下さい」

「…ねぇ」

「はい？」

「その敬語もどうにかならない？」

敬語とか嫌だな…同じ年の子に言われるの。

「これはなりません！私はメイドですからっ敬語は絶対なんです！」

ぶんぶんと首を大きく横に振られた。

仕方ない…か。

「ならしょうがないね、分かった。でもちゃんと亜子って呼んでねっ」

「はい…」

「うんっ！」

そして亜子は今まで知りたかった事を諷羅に聞いた。

「ねえ諷羅、聞いていい？」

「はい、何ですか？」

「この世界にはもしかして…。……魔法が存在したりする…？」

「はい、この世界で主に使われている力は魔法ですから」

やっぱり！サクヤさんの話を聞いて思ったんだよね。六人の力…炎、水、風、土、光、闇…。それは魔法だって…。

やっぱり魔法かぁ…。

ほんとにファンタジーだな…。

「…亜子？どうしたんですか？」

「何でもないよ、教えてくれてありがと諷羅」

「いえ…お役に立てて良かったです」

諷羅は本当に嬉しそうに、にっこりと笑った。

「ではお食事が終わった頃にまた来ますね」

「分かった」

軽く礼をして、諷羅は部屋から出ていった。

一人になったあたしは、この世界の事について考える。

「……何か…凄いな…。あたし今異世界に居て、世界を救う人になっちゃって、…あり得ないよね…。しかも魔法まで存在して…」

今まで普通の高校生やってたのに…。変なの。

亜子はクスッと微笑した。

「でもまっ！楽しむって決めたし！頑張ろっとっ！！」

亜子は背伸びをし、テーブルに置かれてる食事を見て、それが冷めない内に食べ始めた…。

――――…

「十夜」

「…何だ」

十夜と旒來は、夕食も食べないで十夜の部屋に籠って仕事を片付けていた。

どうやら終わらなかったらしい。

「…いえ」

沈黙が流れた…。

二人は黙ったまま仕事をし続けていた……。

――――…

「はぁーっお腹いっぱい…」
でも美味しかった！こっちの世界の料理はどんなものかと思ったけど、ちゃんと食べれたしっ。

満足満足！！

「さて…と。まだ諷羅来ないよね、暇だなぁ…」

ふと窓の外を見ると、月が闇の中で輝いていた。

それがとても綺麗で…思わず見とれてしまった。

その中で、亜子の心の中に好奇心が芽生えた。

「ちょっと外に出てみたいなー…気になる！いいかなぁ…」

外を見回し、誰も居ない事を確認すると、窓を静かに開けた。

外から涼しい夜風が吹いてくる。

益々行きたくなっちゃった！！

亜子はひょいっと足を上げ、近くに立ってる木に降りようと手を伸

ばした。

ギリギリの所で届かない…。

徐々に手を伸ばしていき、あと一センチ程の距離まで近づいた。

そしてキャッチ！

よしっ！

次の瞬間…亜子は木に飛び移った。

ガサガサッ

木は軽快な音を立てて揺れたが、落ちる事はなかった。

「あたし結構木登りとか得意なんだよね」

スルスルと下に降りていき、無事地面に着地！

結構高さがあったのに…さすがだ。

「あぁぁ！久々の外だ！何処行こっかなぁ…。てか諷羅が来る前にちゃんと戻んなきゃねっ」

一人呟き、暗闇の中を歩いて行った…。

…この行動が、後に大事件を引き起こすなど、この時の亜子には知る由もなかった……。

†〜2〜†

夜の外は風が涼しく、月に照らされた道がとても妖しかった。

その中に…軽やかなステップで歩く少女約一名…。

「はぁーっ…広いなぁこの…城？屋敷？これ全部十夜のなんだよね、凄い…」

一人感心していた。

「てかあたし帰り道覚えてるかな…。…知らない。此所何処って感じだし！まぁいっか！適当な窓から入ればいいよねっ！」

超ポジティブな女の子亜子。誰もが羨むその性格！！

…とまあそれはいいとして…。

「うーん…どっちに行こう…」

亜子は分かれ道にさしかかった。右左どちらに行こうか考えている様子…。

顎に手を付け唸っていると…。

「…うん、右で！！」

何を根拠にそんな事言うの。勘？勘ですか？

亜子はくるっと右を向き、すたすたと歩いて行った…。

そして何故か歌を歌い始めた。

「人生～色々！男も～色々！…えー…。ウォッホンっ、あー…。…ありがとうと、君に～言われると、何だか切ない…あぁ切ない…。切なくなってきた…。あとはー…」

まだ歌うんかいっ！！

「女だって色々咲きみ・だ・れ・る・わっ。あっ最初に戻っちゃった。えっとじゃあ…。あたし愛ちゃん好きなんだよねー、だから…。行きたいよ、君の所へ。…疲れた…やめよ」

早いなおい。

「んー…何しよう。何したらいいんだろう。…まぁ歩いてこっと！」

愉快に歌を歌っていた為、亜子は気づかなかった。

…闇夜に蠢く、妖しき微笑みに……。

†〜3〜†

愉快にステップで歩いていると…目の前に怪しい黒い影…。
人が立っている気配がする。何だろう…。
「……」
何だか怖くなってきたので、踵を返し戻ろうとした時…。
「無視しないでよ」
え…。え？
今…男の声が後ろから…。
じゃああの影はこの人…。
「ねえってば」
「！！っ…！？」
目の前にドアップの男の顔があった。
あたしはすかさず後ずさる。
びっ…びっくりしたぁ！！
「お、驚かさないで下さい！」
「ごめんごめん、だって無視して行こうとするから」

男はけらけら笑っていた。
暗くて余計その笑いが不気味に聞こえる。
あたしは怖くなった。
何か…何だろう。この人は…やばい。何故か分からないけど…そう感じる。
てか…。
全身黒服って…。どーよそのセンス。
「悪かったな、センス無くて」
「えっ?…あたし今…口に出してた?」
「出してた」
「あぁ…ごめんなさい。でも全身黒はねぇ…」
「文句付けんなよ。てか女の子が一人こんな夜にどうしたの?散歩?」
「はい、散歩です。他に何があるんですか」
その返事を聞いたら少し驚いて、ふーんて言って、何故かあたしを見た。
ジロジロ見られてるの…嫌だ。見ないで欲しい。
見られるの好きじゃない。しかも初対面の人に…。

観察されてる気がするし。
「…み、見ないでよ」
男は聞こえたと思うのに、まだあたしを見てる。
もうほんとに何なの！？
「ちょっと！見ないでってば！」
二回も言ったのに…聞いてくれない。
あたしはこいつが嫌になったので、後ろを向き帰ろうとした。そしたら急に腕を引っ張られた。
「！？」
突然の事について行けない亜子は、急接近した男の顔を見る。
…紅い瞳があたしを捉えた。
瞬間背筋がゾクリとした。
「っ…」
逃げようと腕に力を込めても、男の力の方が強すぎて離れられなかった。
むしろ近づいてる気がする…。
あたしは堪らず声を出した。
「ちょっと！！あんた何！？」

「――…欲しい」

「は？」

な…何言っちゃってるのこの人。欲しいって…。

混乱していると、段々顔が近づいてきた。

「だから待ってよっ！ちょっ…離せぇぇぇ！！」

思いっ切り力を込めて離れようとした。でもビクともしない。

こンの馬鹿力ぁぁっ！！！

そしてゆっくり顔が近づいていく…。

「っ…！」

もう駄目だと思った。

しかしその瞬間―…。

ヒュンッ…

ドカァンッッ！！

…ぇ…な…に…？

横を何かが掠めて、前から何か崩れた音…。

あたしはゆっくりと目を開ける…其処で見たのは…。
「…！！」
すっ…ご…！！木が…木が無くなってる！彼処にちゃんとあったのにっ！
跡形もなく無くなってるよぉ！？
無惨にも亜子の目の前にあっただろう木が見事に無くなっていた。
吹き飛ばされたのか何なのか…。
亜子には理解出来なかった。
というか…今何が起こったの？何かが横を掠めて、木が無くなって…。
……え？
あたしは恐る恐る顔を後ろに向ける。見た瞬間…恐怖を見つけた。
「邪魔しないで欲しいんですけど」
男が呆れたように呟いた。
しかしあたしにはそんな言葉頭に入ってこなかった。これをどうしようかと…焦っていた…。
「……十…夜…」
暗闇の中に立っていた青年…それは――…。
言い様のないくらいの殺気を放っている…十夜だった――…。

†〜4〜†

「十夜……」

…やばい…この状況は…やばすぎ…。てか十夜めちゃめちゃ怒ってるっ！！

そうだよね！勝手に外出ちゃったし歌なんて歌っちゃったし！

あぁもう！どうしよおぉぉ！

「―…離せよ」

うわぁー…声低っ。超怒ってますね、うん確実。微かに期待してたけど実は。

「…嫌だね」

余計力を入れて抱き締めてきた。

ちょっと離れてよっ！！

「こいつは俺の」

「はっ…」

言葉が出ません…。どんだけ強引なのあんた…。

「ちょっ

「離れろよ」」

十夜…あたし今めっちゃ文句言って頭噛もうかと思ったんだけど。
遮られた。
「嫌っつってんじゃん。うざいし」
うざいのはあんただ。
もう我慢出来ない！
いつまで抱き締めてんのよっ！！
「離して！！セクハラ野郎！！」
じたばた暴れる。
しかし手首掴まれて動けなくなった。
「あんた…っ…」
ゴォッ…！！
「！！」
突然十夜の周りに風が吹いた。そしてその風が鋭い刃となり…。
ヒュンッ…！
此方に向かって来たぁ！！
ぐいっと腕を引っ張られ、宙を舞った。
へ…。

しかし次には十夜自身が向かって来て、あたしの目では速すぎて追いつけなかったけど。
セクハラ野郎に右ストレート蹴りを食らわした。

「ぐっ…」

セクハラ野郎は少し吹っ飛び、それによって支えを無くしたあたしは、下に真っ逆さまぁぁ！？

落ちると思い、痛いだろうと予測してあたしは瞳を閉じた。

…瞬間何かに手を引っ張られて、暖かい所へと運ばれた。

そしてゆっくりと降りて行く…。

足が地面に付いた時、あたしは瞳を開けた。

其処に居たのは…。

不機嫌そうな顔をした十夜。

…また…守ってくれた…。十夜…またあたしを…。

怒ってるのに…。

「……怪我ないか？」

「あっ…ぅん…」

「そうか、良かった。……で、お前はこんな所で何してるんだ？」

…ひっひえぇぇぇ！！！
怖いぃぃっ！！
笑ってるけど怖いっ！！
だって十夜の後ろに黒いオーラが見える…！！
何かもう…どうしたらいいのか分かんない…。

「ったく…後で説教な」

「は…はい…」

説教…何言われるんだろう…。
てか十夜ってこんなダークだったんだ…。最初見た時はもっと優しい人だと思ってたのに。皇子だし…ちゃんと笑ってたし。

本当はこれが本物の十夜だったり…。

はぁ…。説教嫌だ…。

「…もう居ないな」

「居ないってさっきのセクハラ野郎の事？」

「そっ気配が感じられないし…何もしないで行ってくれて良かったよ」

「…ぅん…」

あたしももう少しで襲われる所だった。
十夜が来てくれなかったらやばかったよ…。

「さて…。…亜子」

「はっはい！」

あたしはなるべく機嫌が直るように、笑顔で答えた。

十夜は…笑ってた…。

あの微笑みで―…。

「俺の部屋行くぞ」

「うっ…ぇ…えと…」

「お前に拒否権はない」

ひぇぇぇっ！！！

…あたしは、地獄を見るだろう――…。

†第五話　始動　〜1〜†

あたしはあの後、十夜に腕を引っ張られて十夜の部屋に向かった。
その間も必死に抵抗したけど、男の力に敵う筈もなく、無駄なもので終わった…。

そして今、十夜の部屋の前―…。

「…十夜…」

まだ怒ってる…。どうしよう…、どうしたら機嫌直してくれるの！？

一人心の中で悩んでいると、十夜が無言で部屋の扉を開いた。

キィ…という音と共に、あたし達は部屋に入った。

扉を閉め、そこでやっと手を離してくれた。

チャンス！と思い、あたしは部屋を出ようと後ろを向こうとした瞬間…。

「逃げんなよ？」

うっ…！

十夜の低い声が響いた。

あたしはもう逃げられないと確信し、怖いが十夜の方を向いた。

「座れよ」

そう言ってテーブルとセットの椅子を指差す。

あたしは渋々椅子に腰かけた。

十夜もあたしの隣の椅子に腰かける。

…と、隣が怖いです。

真っ正面に座って下さい！

しかし十夜はあたしの方に体を向け、明らかに怒ってますよオーラを放つ。

「亜子もこっち向け」

「……」

無視しようと下を見ようとした時…。

「亜子？」

…十夜の声は優しくなったけど、これは怒ってる声。

こっち向かないと許さねーぞ的な感じの…。

怖すぎですよ！？十夜さん！

これは無視出来ないなと思い、あたしはゆっくりと体を十夜に向けた。

「…っ…」

怖くて何も言えない。
怒られる。殴られるーっ！！
少しの沈黙が流れた後、十夜が話し出した。

「…ンな固くなんなよ。怒鳴る訳じゃねーから」

少し…ほんの少しだけど、十夜の声が柔らかくなった気がした。
あたしはホッとした。そのお陰で緊張が少し取れた。
「あの…十夜、あのね…」

言い訳を考えるが、思い浮かばない。

しかし十夜は何故あたしが外に居ると分かったのだろう。大声で歌歌ってたから？
うぅーん…。

「亜子」

急に名前を呼ばれたので、体がびくっと震えた。

「…お前、何で外に出たんだよ。諷羅が心配してたぞ？」

「えっ…？」

諷羅が…。そっか、悪い事したな…。

「…じゃあ十夜、諷羅に聞いてあたしの所に来たの？」

「あぁ。てか気配感じたんだ。だから何かあると思ってたら、諷羅が亜子が居なくなったって言ってきて…急いで探した」

そっかぁ…みんなに迷惑かけたな…。

「…ごめん、心配かけて…」

「いいよ、無事だったんだし」

十夜…もっと怒られると思ってたのに、怒らない。

優しいよ…十夜…。

「…もう勝手な事するなよ」

そう言ってあたしの頭に手を乗せ、微笑んだ。

十夜の性格がよく分からないよ…。怒ったり優しくなったり…。

「で…何で外出たんだ？」

えっ…。…言わなきゃいけない？

でも言わないと怖い…。

笑ってるけど黒いから。

「…好奇心が…」

「はっ？」

「だからっ外に出たくなったの！暇だったし…」

チラッと十夜を見ると、何か下向いてるから怒ってるのか分かりま

せん！

多分怒ってると思うけど…。

「はぁ…」

えっ！ため息！？

「ごめっ…十夜！勝手な事してごめんね！」

だから何か言ってー！！

そしたら顔を上げ、あたしを見た。しょうがねぇなって顔してる…。

「今度俺が街案内してやるよ、だからそれまで待ってろ」

「十夜…」

…ほんと、怒ってるのか優しいのか分かんない。

でも…優しいね。ありがとう十夜。

†〜2〜†

「何笑ってんだよ」

「だ…だって、分かりにくいよね、十夜って」

「はっ？」

「だって怒ってるのか優しいのか分かんないよ。…それと…」

あたしは今まで言いたかった事を口にする。

「来てくれてありがとう。嬉しかったよ」

言った後十夜は顔を真っ赤にし、目線を逸らした。

「それは…お前の守護者だし…」

「うん、ありがとう」

またお礼を言ったらもっと顔を赤くした。

それが可愛くて、また笑っちゃったんだ。

「―…それより！」

「えっ？」

いきなり大声を出したからびっくりして目を開いた。

「……あの男には近づくな、分かったか？」

「あの男って…変態野郎の事？」

「ん、そう。あいつは…危険人物だから」

「危険人物？」

それって…。どういう事？確かにあいつは変態だから危険だけど…、他に意味があるの？

「あいつは…敵だ」

敵…敵？敵って…。敵！？

「敵ってどういう事！？」

あたしはつい椅子から立ち上がった。

てか敵って何！？危険人物ってそういう事っ？

「とにかく座れ、説明する」

「う、うん…」

言われた通りあたしは椅子に座った。

そして十夜が話し出した。

「…この世界には六つの力を持った者が居るよな。炎、水、風、土、光、闇…、俺はその中の風の力を得意とする」

「へぇー…」

だからあの攻撃があぁだったんだ…。
「そして奴は…闇だ」
「えっ…闇？」
「あぁ。闇は俺達にとって必要不可欠のものだ。ないとこの世界を守れない。けど闇は今…孤立してるんだ」
「孤立？」
何で…いじめにでもあったの？
訳分かんない…。だって闇の力がないと世界は崩れる。なのに闇が孤立って…。
「…いじめは良くないよ？仲良くしなきゃじゃんっ」
「はい？」
「だって闇は今孤立してるんでしょ？十夜達が何かしたんじゃないのっ？仲良くしようよ！必要な存在なのに…」
「いや…違うって。話を最後まで聞け」
「っ…」
だって変じゃん…、何で？
「闇は…敵だ。必要な存在だけど…闇は敵になったんだ」
「どうして？」

何のせいで？もう…戻らないの？

「……この世界の人々の憎悪、哀しみ、苦しみ…そういうのが塊になり闇になった。そして次第に狂った闇が大きくなって…誰にも止められなくなったんだ」

「そんな…」

そんなのってない…。可哀想すぎるよ…。

「闇は俺達に反抗して、協力しなくなった。闇の力を持った守護者も行方不明になって…今世界は半分くらい闇に染まってる。それに対抗出来るのは、力を持った者…。残りの守護者達と、巫女、それから亜子だ」

「そうなんだ…」

「闇を消す為に、亜子は動く。俺達も動く。そして闇の守護者を探し世界を救う。長い道のりだけど…やらなきゃいけない」

「うん…」

あたしは世界を救う為に此所に呼ばれたんだ。闇を消して、また元のように戻す。

それがどんなに危険でも…。

「けど闇の力が強すぎて…、だからさっき会った奴とかも現れる。あれは闇のせいで創られた…人だ」

「闇で人も創れるの！？」

「不可能じゃない。だから厄介なんだ…」

「…戦いたくないよね…」

「あぁ…」

そうだよ…敵でも仲間だ。戦いなんてしたくない…。必要な力だし、十夜達にとっては大切な存在。なのに戦わないといけないなんて…、辛すぎる。

「でも止める為には戦わないといけない。何がなんでも…な」

「っ…」

…胸が痛い。十夜の悲しい微笑みを見たら…、胸が痛くなったよ―…。

辛いよね、苦しいよね…。仲間と戦うなんて…嫌だよね。なのにそうしないと駄目だなんて…残酷すぎる。

あたしに…みんなの悲しみを取り除く事が出来るんだろうか。また笑える日が来るんだろうか。

…それは、あたしの頑張り次第だよね。

「十夜…あたし頑張るから。頑張って世界を救う、みんなを救う！だから一緒に頑張ろう！！」

「亜子…」

そして…十夜は柔らかい笑みを向けた。

「―…あぁ、頑張ろうな」

「うんっ！！」

頑張ろう。一緒に……。

その為にあたしは、あたしに出来る事をする。辛くても負けないから。…ね！！

†〜3〜†

「これからは…大変になる。闇に狙われたり、色々な妨害をしてくる。闇にとって俺達は邪魔な存在だから、消そうとする…。だから俺から離れるな、いいな？」

「うん、分かった」

…ん？ちょっと待てよ…。さっき会った変態野郎は闇で敵なんだよね。じゃあどうして…欲しいなんて言ったの？消せば良かったのに…何で？

…まぁいっか。今度会った時とかに聞けばいいよね。

「敵の話はここまでだ。あと話す事は…」

「また分からない事があったら聞くよ」

「あぁ。それと亜子」

「ん？」

「今お前がしなきゃいけない事は、分身の珠玉に力を入れる事。大変だろうけど…俺がいるから、心配すんなよ」

「う、うんっ…」

そんな優しい笑顔…向けないでよ。ドキドキしちゃうじゃん…。

…やばい、顔が熱い。

もぅっ！十夜の馬鹿！！

「…じゃ、じゃあもう寝るね！部屋戻る！」

「分かった、おやすみ。あっあと亜子」

「はい！？」

やばっ！声裏返っちゃった！

「…大丈夫か？」

「大丈夫！でっ何！？」

「何かあったらすぐ呼べよ」

「…っ！うん！」

馬鹿十夜！！そんな優しい言葉かけるな！！

心の中で叫び、あたしは急いで部屋を出た。

「…何焦ってんだ？あいつ」

亜子の心情など知る由もない十夜であった…。

そして夜は明けていく――…。

何もかもが動き出す中―…、まだ気づかない亜子は心臓の音に耳を澄ませ、深い眠りについた……。

†〜4〜†

もう語られる事のない物語…。亜子が知らない間に起こった真実――…。

――――…

場所は亜子の家の中…。其処から漂う空気は妖しく、煌めいていた……。

血で――――…。

…佇むのは一人の男。男は手に付いた血を残さず舐め取っている。

周りに在るのは…。

血を流して倒れている二人の男女。ぴくりとも動かない。死人のように…。

男は全ての血を舐め終わると、薄紫の髪を揺らめかせ、開け放たれている大きな窓へと向かった。

空は暗く、何の音も聞こえない。夜中だった。

静かに地面に立ち、前の塀に座っているある影に目をやる。

「―…終わったの？」

聞こえたのは高い女の声。暗闇で響いている為、余計妖しく聞こえる。

「……あぁ」

「そぅ…」

女はふと窓の方へ目をやった。瞳に映るは血を流した二人の男女。

女は微かに微笑むと、男へ目線を移した。

「…行こう」

そう呟き、塀から降りる。
そして男と共に闇に消えた―…。

「―…ねぇ…早く逢いたいね…選ばれし少女に……」

それだけが暗闇に響いていた――…。

――…

「……ん…っ」

眩しい…。

もぞもぞと布団の中で蹲る。そしたら突然…。

「亜子、起きて下さい」

上から声がした。

「んん…誰ぇ…？」

「諷羅です、亜子」

ぇ…諷羅…？

あたしはゆっくりと体を上げた。横には諷羅が立っていた。

「おはようございます、亜子」

「おはよう…諷羅…」

もう朝か…何か寝不足…。

「昨日は本当にびっくりしたんですよ、亜子。外に出るならちゃんと言って下さいね」

「えっ」

あたしは目を大きく見開き、諷羅を見る。

「あは…ごめん」

「無事だったから良かったですけど、何かあってからじゃ遅いんですからね、分かりましたか？」

「ふぁーい…」

何で朝から説教聞かなきゃいけないんだろう…。
ちょっと沈む…。というか眠い…。

「今何時？」

「9時です、起きましょう。朝食持ってきたので」

「ん…」

仕方ない…起きるか。

のそのそベッドから出て、伸びをする。

「顔洗ってきて下さい。それから服を選びますので、どれがいいか決めておいて下さいね」

と見せられたのは、色とりどりの……。

「…何でドレス？」

「今日十夜様とお出掛けになると聞きましたので、可愛くしていきましょう」

にっこりと微笑みを向けられ、あたしは起きたばかりの頭を回転させる。

お出掛け…今日なの？
へぇ…優しいじゃん、十夜。

「分かった」

あたしは頷くと、諷羅はまた微笑した。

「では朝食を食べ終わった頃に来ますね。ドレスは後程お着替えしますので」

そう言って軽くお辞儀をし、部屋から出ていった。

あたしは顔を洗いに洗面所へ…。

†〜5〜†

それから顔を洗って、朝食を食べた。
亜子は朝は洋食と決めていたので、洋食が用意されていたから嬉しかった。

朝食を食べ終え歯磨きをする。
そして色とりどりのドレスに目をやり、手を腰に当てて考えていた。

「うぅん…どれがいいんだろう…」

本当は制服が良かったんだけどきっと駄目だろうな。
なら一番動きやすい物がいいから…。

…てかあたしこんな高価なドレス着たことないし、似合うのかな…。

仕方がなく一番シンプルな淡いピンク色のドレスを手に取った。

白はウエディングドレスだもんねっ。

「諷羅が来るんだけど…自分で着ていいよね、そんな難しくないでしょ、着るぐらい」

そう言って着ていたパジャマ（これもまた高価なもの）を脱ぎ、ドレスを着ようと足を入れたその時…。

コンコンッと窓から音がした。

何事かと窓の方を向くと…。

「……」

まだ幼い男の子が木に座ってこちらをにこにこと見つめていた……。

亜子は突然の事で状況が理解出来ず、足を入れたままの状態で固まったまま…。

男の子はひらひらと手を振っている。

「……！！！」

やっと状況に理解した亜子は、赤面し、とっさに近くにあったクッションを投げつけた。

それは窓が閉まっている為、男の子に当たらないまま窓へ激突。

ずるずると下へ落ちていく…。

亜子は震え、堪らず声を出した。

「いぃやあぁぁぁあっっ！！！！！」

喉が千切れんばかりに叫び声を上げ、下着姿の自分をドレスで隠した。

男の子は驚愕の顔をし、焦ってしまった。

すると廊下からバタバタと複数の走る音が聞こえてきた。

足音は亜子の部屋の前で止まり、瞬間扉が勢いよく開け放たれた。

「亜子っ！！どうした！？」

「入ってくるなあぁぁぁ！！」

「えっ…？」

最初に部屋に入ったのは十夜だった。拒否の言葉を浴びせられ、体が止まる。

後から旒來と諷羅が入ってきた。

三人は亜子を見て固まってしまった…。

亜子はしゃがみ込んで窓の方を睨んでいる。

諷羅は気づいて亜子の元へ駆け寄り、ベッドから毛布を取り亜子に掛けてあげた。

十夜と旒來もそれに続いて亜子の元へ行く。

二人は亜子の前に立ち、諷羅も亜子を庇うように抱き締めた。

四人は窓の外の木に座っている男の子を睨んだ。

男の子はまだ慌てている。

すると十夜が亜子に話しかけた。

「亜子…あいつは？」

「知らないっ！いつの間にか其処に居て…」

あたしは何故か、体が震え始めていた。
これは怒りなのか恐怖なのか分からない。
ただ震えるしかなかった。

「十夜、あいつは…」

旒來が十夜に話しかけた。十夜は目線は男の子の方に向けたまま、
旒來の問いに返す。

「…闇か」

それを聞いた途端、あたしは勢いよく立ち上がり、窓の方へ走った。

「亜子っ！！」

後ろから十夜の声が聞こえるけど気にしない。
あたしはこいつに用があるの！！

バンッ！と大きい音を立てて窓を開き、あたしは男の子に向かって

叫んだ。

「ちょっと！闇だかなんだか知らないけどね！女の着替えを覗くなんて最低だよ！？反省しなよっ！！」

男の子は驚いて固まってしまった。しかし次には真剣な瞳になり…。

「……あなたに、伝えなきゃならない事があるんだ」

「えっ…？」

伝えなきゃならない事？何それ…。

つい黙ってしまったあたしに構わず、先を続けて話す男の子。

「――…あなたの力を求めて、人が集まる。守護者なんかじゃ護り通せない程強いモノが来る…気をつけて…」

それだけ言うと男の子はひょいっと軽い身のこなしで木を降りていった。

四人はそれをただ見つめるしかなかった…。

†〜6〜†

ふと…何かを思い出したように、亜子は自分の体と三人を見た。

その瞬間…また顔を赤面ししゃがんで声を上げた。

「いやぁっ！！」

「「「！？」」」

三人は突然の亜子の叫びに驚愕し、亜子を見た。

「ぅっ…見られた…」

「「あ…」」

状況を理解した二人は、すぐさま視線をあさっての方向に向ける。

「み、見てねぇってっ」

「嘘っ！うぅ…」

「本当に見てませんよ、十夜、私達は戻りましょう」

「あ、あぁ…」

二人はそのまま部屋から出ていき、部屋には亜子と諷羅二人きりになった。

「亜子…大丈夫ですか？」

「…大丈夫じゃないかも…てかあの子は何なの？闇…なの？」

「分かりません…ですが危険です。一人で行動するのは控えて下さいね」

「うん…でもあの子…どうしてあんな事言ったんだろう…」

それに…あの意味はつまり…強大な敵が来るって事でしょ？十夜が危ないんじゃないの…？

「…何かあるんでしょうか…」

「ん…」

心配だな…十夜…。

「最近、亜子に危険が多いですね…。一人は危なすぎますので、いつも誰かと一緒に居てはどうですか？」

「いつもって…」

まさか…。

「はい、いつもです。朝も昼も夜も」

いや…無理でしょ。

「そうですねー…、十夜様がよろしいかと」

「えぇ！？とと十夜！！？無理無理！無理に決まってるじゃん！！」

「そうですかね…安全だと思いますよ？」

「朝も昼も夜も一緒って事はつまり…！」

寝る時も…着替えも…お…お風呂も…？
無理ですからあぁぁあ！！！

「何言ってんの！！非常識でしょっ！！プライバシーの侵害だし！！それに十夜は皇子でしょ！？無理だよ！！」

「皇子でも十夜様の意思があれば可能だと思いますよ？頼んでみませんか？」

「いいっ！いいです！！」

何か諷羅楽しそうなんだけどっ！？遊んでる！？
てか十夜とずっと一緒って事は…。
……無理無理無理無理！！！
あんなイケメン男子といつも一緒は無理！！
心臓もたないっ！！

「亜子？どうしました？」

「っ…！」

あたしは思いっきり諷羅を睨んだ。
もの凄い怒りを込めて！！

「ひっ！」

諷羅は一歩後退ったが、あたしは睨んでいる目を逸らさない。

だって絶対！！遊んでた！！

「…諷羅あぁぁ…」

「あ…亜子…？」

諷羅の顔が段々青ざめていく。それでも威圧を放ち、一言言葉をぶつけた。

「いい加減にしてっ！！！」

城にはあたしの怒鳴り声が止まる事なく響いていた……。

†第六話　照れる君と優しい笑顔　～1～†

中庭―――

「ちょっとー、今の悲鳴何？煩いんだけど」

高級そうな椅子に座ってカップを啜っている一人の女…。

短く赤いワンピースからスラッと伸びた長く、細い足。

艶やかなピンク色の腰まである少し巻かれた長い髪は、微かな風によって揺れていた。

「はい、多分あの声は噂の少女だと思います」

ガードマンらしき黒いスーツを着た男が、女に告げた途端、女は口端を上げ妖しく微笑した。

「そう、あれがね…へぇ…」

「…どうしました？」

「ううん、ただ…会ってみたいなぁと思って…」

その妖しい微笑みは消える事のないまま…風に溶けていった…。

――――…

「はあぁぁぁ…」

誰もいない部屋で一人、ため息を吐いたのは…疲れきっている亜子。

あれから亜子に怒られ、でも笑顔でそれを聞いていた諷羅に呆れたので部屋から出した。

そして一人考え込む…。

理由は諷羅が言った言葉…。

「いつも誰かと一緒に居てはどうですか？」

それは…十夜と…。

「無理だから！！うぅ…」

てか…何であたしこんな焦ってんの？
まだ十夜と…あ、朝も昼も夜も一緒って決まった訳じゃないのにっ…。

「変だ…あたし変だよ…」

何でこんな十夜の事…。

「元はといえば全部諷羅のせいだ！！」

諷羅が変な事言うからー！！

「はぁ…疲れた…ちょっと休もうかなぁ…」

十夜が今日街案内してくれるって言ってたけど、まだ来ないっぽいし、大丈夫だよね？

あたしはのそのそとベッドに向かい、布団を被って夢の中に入ろうとしたら…。

コンコンッ

扉を叩く音。

十夜が来たのかな？

あたしはベッドから起き上がり、十夜だと思って扉を開けた。

瞬間…あたしは口を開けたまま固まった。

十夜だと思って開けた扉の先に居たのは…。

とても美人な女の子。

芸能人より可愛いこの子。

しかし…あたしはこの子が誰か全く見当がつかなかった。

会った事ない…誰？
てか…スタイル良いー！！
羨まし！！顔小さいし足細すぎっ！！
何だこの美少女はっ！！

と一人熱くなっていると…。

「あなたが…亜子さん？」

「へっ？」

あたしを知ってるの？何で…。

「…はい、そうですけど…」

何だぁ？あたしに用事？

「そう…あなたが…」

にこっと可愛く微笑む顔は、本当に美しくて思わず魅とれてしまった。

「…えっと…何か用ですか？」

「えぇ、あなたに話があるの」

「話…？って…」

「……あなた、十夜の何ですか？」

「ぇ…」

十夜の何ですか？と…聞かれても…。
えぇっと…それは一体どういう事ですか？
意味が分からないんですが…。

「十夜とどういう関係ですか？」

「へぇ？」

どういう関係って聞かれても…。どういう…うぅん…、……何だろ？

「亜子さん？」

てか…あなたは何なんですか？十夜十夜…。

「あなた誰何ですか？十夜の知り合い？」

「知り合いよりももっと深い関係です」

深い…関係？それって…。

何…？

…嫌だ、何か…モヤモヤする…変だ。

「っ…」

やだ…この気持ち…。

あたしどうしちゃったのおぉぉ！？

「洙梨(しゅり)！！」

へっ？今十夜の声が聞こえたような…。

「洙梨！お前こんな所で何してんだよっ！」

遠くから十夜が走ってきた。

…ん？洙梨って…この美人さんの事？

「お兄ちゃん！！」

……え？

おに…お兄ちゃん…？

「ったく…庭に居ないと思ったらこんな所に居たのかよ」

……。

「だってぇ…ごめんなさい…」

「いいけどさ…つか二人して何やってんの？」

……。

「私がちょっと亜子さんと話したくて、ねぇ亜子さん？」

……。

お兄ちゃん…？
じゃあこの子は……。

「妹おおぉぉお！！？？」

「ぅわっ！！亜子どうした？」

信じらんない！！
こんな美人な妹がいたの！？
てかあたしより年上っぽいよ！？
妹って…！まじなの？

「十夜…この子妹なの…？」

「あ？あぁ…妹の洙梨」

「初めまして亜子さん、妹の洙梨と申します」

そう言って洙梨…ちゃん？は軽くお辞儀をした。

つられてあたしもお辞儀をしちゃう。

「あっ…亜子です、初めまして」

ひえぇ…あたしより背の高い子が十夜の妹って…。
しかもあたしより年下なのにめっちゃ大人っぽいのに…。

……この世界って美形美女ばっか？

「洙梨、親父が探してたぞ？部屋に居るから行ってやれよ」

「えぇ？一人じゃ嫌だよー…お兄ちゃんも一緒に来て？」

ちょっとちょっと！！
妹のくせに腕に手回してベタベタするな！！
それと兄貴相手に甘い声出すなよっ！！
上目遣いも！！！

「悪いな、俺亜子に用があるからさ」

「…ふぅん」

怖っ！！そんな瞳で睨まないで！！怖すぎです！！

「じゃあしょうがないね、またねお兄ちゃん、…亜子さん」

「ぅ…うん…」

とてもとても怖い美女がやっと行ってくれました。

うぅ…怖かったよぅ…。

「ごめん亜子、洙梨変な事言ってなかったか？」

「へっ別にー…。…あ」

「あ？」

…そういえば、十夜とどういう関係とか聞かれたなぁ…。
あれは何故？

「何か言ってたのか…ったく…洙梨の奴…」

「あぁー！あたしは大丈夫だから！！」

大丈夫だけど…嫌われてるよな…あたし。

睨まれたし色々言われたし。

はぁ…十夜の妹だから仲良くしたいけど…向こうはそう思ってないだろうな…。

「放っといていいからな、あいつ」

「え…、……」

そう言われても…絶対向こうから来るよね。
あぁいう性格の女は戦闘型だからね。

…うん。あたしはあたしなりに頑張ろ！！

「ところで十夜、あたしに用があったんじゃないの？」

「あぁ、街案内してやるよ」

「ほんと！？わぁい！！」

やったぁ！！街見れる～！！

「準備出来たか？」

「あぁっと…ドレス着てない…」

「ったく…待っててやるから早く着てこい」

ぽんっと優しく頭に手を置いて、微笑んでくれた。

その笑顔にドキドキしつつも、あたしは部屋に戻った。

――――…

「うぅん…このドレス作りが複雑だ…」

簡単だと思ってたピンクのドレスは、実は意外に着るのが難しいものだったらしい。

他のドレスも同じ。

「どうしよう…悩んでる暇なんて無いし、十夜待たせちゃうから…」

チクタクチクタク…

「〜〜〜！！えぇい！！ドレスが着れないで世界なんて救えるかぁ！！」

あたしは頑張ってこのドレスを着る事にした。

気合いで何とかなり、ドレスは着れた。

あとは飾りだけど…。…このネックレスがあるからいいよねっ！

準備が出来た為、急いで十夜の元へ行った。

扉を開けると、十夜は壁に背を付けて下を向いていた。

「十夜！お待たせ！！」

「あ、あぁ…、！！」

あたしの声に気づいた十夜がこっちを見た直後、何故か十夜の顔が赤くなっていった。

「十夜…？」

十夜はそのまま固まってしまう。

…もしかして、この格好変？
あたし似合わない？

…そうだよね…やっぱあたしの性格上ピンクなんて似合わないよね。
赤とかにすれば良かった…。

「…十夜、変？」

固まってる十夜に近づき、顔を覗く。

そしたらいきなり目を見開かせて、顔を横に向かせた。

「い、いやっその…」

「……」

やっぱ変か…。

「ごめん…着替えてくるね」

「えぇ！？何で！？」

「え…だって変でしょ？あたしにピンクは似合わないよね…」

「似合うって！！可愛いから！！」

「えっ…ほんと？」

「あぁ！てか魅とれてたって言うか…っうあぁくそっ！何言わすんだよ！」

十夜…可愛いって言った…嬉しい…。

「っ…とにかく！似合ってるんだから着替えなくていい！よし行くぞ！！」

「えっ？ちょっと待ってよ十夜！十夜ー！！」

…嬉しかった。本当に嬉しかった。

十夜に可愛いって言われて、すごい照れちゃった。

ありがとう十夜。

嬉しいよ！！

†〜2〜†

「うわぁ…！すごい！お祭りみたーい！！」

二人は今街の中心部に居て、其処は人々が行き交い、まるで祭りのような賑わいになっている。

色々な髪や瞳をした者達が居て、種族は人が主だ。

「すごい人だね十夜！」

「あぁ、この街は人口が多いからな。いつも祭りのような賑わいなんだ」

「へぇー！あっ！あの店雑貨屋？」

亜子は雑貨屋のような店を見つけ、其処へと走っていった。

十夜もそれに続く。

二人が来た場所は、アクセサリーなどが沢山売っている店だった。

どれも可愛い小物や、綺麗な指輪、ネックレス等が売っている。

「凄い可愛い！あっこのブレスレット綺麗！！」

亜子が見つけた物は、銀色のブレスレットに沿って、陽の光によって反射したとても輝いた宝石のような物が散りばめられた物だった。

亜子は一瞬にしてそれに瞳を奪われた。

「綺麗だなぁ…」

ブレスレットは亜子の眼前にさらけ出されている。

その様子を見た十夜は、喉でククッと笑い、亜子の傍に移動した。

キラキラと瞳を輝かせている亜子を見て、何か別の感情が芽生えた事に気づかない十夜。

その感情に気づくのは、もう少し先―…。

「欲しいのか？」

その問いに亜子はバッと十夜の方を向き、期待の眼差しを向けた。

「欲しい！！」

「フッ…買ってやるよ」

亜子の様子が可愛くて、買って喜ばせてあげたかった。

十夜の答えに、それはそれは嬉しそうな顔で微笑んだ亜子を見て、また笑いそうになったがそこは堪えた。

「ほんと!?買ってくれるの?」

「あぁ、欲しいんだろ?」

「うん!!ありがとう十夜!!」

また笑顔で笑ってくれる。

この笑顔は護りたい。

何がなんでも――…。

十夜は亜子が欲しいと言ったブレスレットを持ち、店の奥へと消えていった。

亜子は十夜が来るまで店の中を見てまわる事にした。

……このネックレスを買った時を思い出したよ。

麻希と二人で雑貨屋に来て、楽しかったね。

麻希……。

もう…会えないのかな？

あたしはこの世界に居ようと決めた。

救えるのはあたしだけだから。

みんなを救いたいの。

でも…やっぱり寂しいね。

帰りたい……そうは思わなくなったけど、寂しいよ…。

ふ…と、何かの影が亜子にかかった。

気づいて後ろを振り向くと其処に居たのは……。

「…亜子さん、少し時間を頂けますか？」

「……洙梨さん――…」

――――…

洙梨に連れて来られて、しかも無理矢理連れられて行かれた為、十夜に何も言えずになってしまった。

絶対心配してるよ～…。
どうしよう…。

二人が居るのは、街の路地裏だ。

賑やかさが抜け、辺りはしんと静まりかえっている。

こんな所十夜見つけられる訳ないよぅ…。何とかして戻らないと。

「あ、あの洙梨さん！何かあたしに用事なんですか？」

この人はあたしが嫌いだ。話なんて…何だろう。

「えぇ…。……あなたは、何をしているんですか？」

「え…？」

何って…？

「あなたが居るべき場所は、此所じゃないでしょう。やる事があるんじゃないんですか？」

やる事って…世界を救う事…だよね。

つまり試練の間に行って力を入れてこいって事…。

…うん、そうだね。

あたしはこんな所に居ちゃいけないんだ。

早く世界を救わないといけないんだから。

なのにあたしは……。

「気づいてますか？お兄ちゃんや旒來さん達が、世界の為に一生懸命動いている事を」

…え…。…そうだったの？

だって二人共…あんなに楽しそうに毎日を送ってた。笑った顔しか見ていない。

だから…全然気づかなかったよ。

それに十夜も、こうやってあたしに街を案内してくれた。

あたしの為に…。

だからそんな事気づかなくて…。

もしそうだとしたら…。

ううん、そうなんだ。

みんな世界の為に頑張ってるのに…あたしだけ…！

「今のあなたは…足手まといの何ものでもないんですよ？」

足手まとい――…。

「世界を救うあなたが…何もしないなんておかしすぎでしょう。こ

んな所に居ないで、みんなのように頑張ったらどうなんですか？…
亜子さん」

「――――…」

力が抜ける…頭が回らない。みんなの事を思うと…悲しくなって、
何もしない自分に苛々して…。

後悔した――…。

あたしは……最低だ――…。

――――…

「亜子――――！！」

十夜は急に居なくなった亜子を探しに、街を走り回っていた。

街の住人に挨拶されても、軽いものしか出来なくて、呼び止められても振り向く事しか出来なくて。

それ程必死に亜子を探した。

でも見つからなかった。

「くそっ…何処行ったんだよ！馬鹿野郎！」

十夜の額には汗が滲み出ていて、その汗は頬を伝う。

そんなもの気にせず走った。

そして、意外な人物を見つけた十夜の瞳は見開かれた。

遠くに見えるのは…妹の洙梨の姿。

十夜は洙梨に向かって走った。

段々と距離が縮まっていき、腕を掴める所まで来た時、その手を取った。

「洙梨！お前何でこんな所に居るんだよ！」

「えっ…お兄ちゃん！」

突然現れた兄に驚き、数分固まる洙梨。

そんな事お構い無しに、洙梨の肩に手を置いて問い詰めた。

「亜子を見なかったか！？」

「え…亜子さん？」

「あぁ！あいついつの間にか居なくなってて、何処行ったか知らないか！？」

「えっと…。…それよりお兄ちゃん、出掛けて良かったの？最近忙しかったよね？」

「ンな事どうでも良いんだよ！！亜子見なかったか！？」

「えっ…と…」

「知ってるのか！？」

図星を突かれて黙り込む洙梨。

そこから十夜は、洙梨は何か知ってると確信し、更に問い詰める。

「教えてくれ洙梨！なぁ！！」

掴んでる手に力が籠る。

「い、痛いよお兄ちゃん！！」

「あ…ごめん」

パッと手を離した。

洙梨は十夜に掴まれていた所を触る。

「…知らない、あんな女…」

「洙梨！！教えてくれ、頼む…」

真剣な眼差しで洙梨を見る。

洙梨は咄嗟に視線を逸らした。

「……亜子さんは…、あっちの方に走って行ったよ」

奥を指差し、十夜はすぐに亜子が走った方に走り出した。

「おに…」

呼び止めようとしたが、十夜は足が早くてもう見えなそうだった。

背中が遠ざかる…。

その光景を見て、洙梨は下唇を噛んだ。

†〜3〜†

カサカサ草木が揺れている音がする…。
周りは静かで、他に音は聞こえない。

…亜子はあれから、何かを拭うようにずっと走った。
走って走って、疲れるまで走って、気づいたら知らない場所まで来ていた。

「…此所…何処？」

空は段々と暗くなっていき、陽が落ちかけようとしている。

どれくらい時間は経ったのだろう。

ずっと一人で居て、…寂しくて…。

「……一人は…嫌だよ…」

亜子は洙梨が言った言葉に沈んでいた。

自分は何もしていない。
それが苛ついて、腹立たしくて、こんな自分…。

「……要らないよね」

亜子の瞳には、暗い悲しみの色しか映らない―…。

歩いて行くと、ドシン…と耳に何か音が届いた。

次には地面が微かだが揺れた。

咄嗟に真っ正面を見る。

遠くだが…でも見える。

蜂を巨大化したような、虫みたいなものが…。

「…何あれ…でかっ！蜂？」

蜂みたいなものは、亜子の存在に気づいて此方に飛んできた。

大きい羽を広げて。

「はあぁ！？こっち来ないでよ！！やだ！キモい～～！！」

亜子は後ろの方を向き、走り出した。

亜子は虫が大嫌いだった。
だからあんな蜂を巨大化したようなものは勿論駄目で、もう泣きそうだった。

亜子は足は速いが、飛ぶ速さに比べれば遅いに決まってる。

距離は縮まっていき、蜂は亜子の前に降りた。

ドシンと大きい音を立てて。

亜子の目の前には巨大蜂。
震えて逃げる事が出来なかった。

…もう、逃げられない。

やだ…こいつ…もしかして魔物？

魔物しかないよね。

最悪〜！！！

巨大蜂は亜子に近づいていき、鋭い針のようなものを突きつけた。

亜子は咄嗟に目を瞑り、痛みに耐えようとした。

数秒後、訪れたのは鈍い痛み。

針が腕に刺さった。

痛くて顔を歪める。

しかし針は余計に深く食い込み、其処からは血が溢れていた。

怖い…！助けて！！

いやぁ…！！

次の瞬間…何かに体を引っ張られた。

何かとは蜂の手のようなもので、体は蜂に囲まれてしまう。

亜子は瞼をぎゅっと強く瞑った。

食べられる…。
もう駄目だ……。

諦めかけたその時―…。

蜂の断末魔が耳に入った。

その叫びは耳が痛くなる程に大きくて、耳鳴りが止まらなかった。

キィィンと耳鳴りがする中…もう感じない蜂の存在に気づき、ゆっくりと瞼を開ける…。

見えたのは……。

片手に鋭い光を放った剣を持っている誰か…。

その人は銀髪で、よく知ってる人…。

亜子はその存在に安心し、名を呼んだ。

「……十…夜――…」

其処に居たのは…十夜。

助けてくれた。

十夜――…。

「亜子――…！！！」

意識が無くなる瞬間…名前を呼ばれた…。

あたしが安心する声で―…。

――亜子はそのまま意識を手放した……。

†～4～†

変な感覚がする……。

麻痺してる感じ…。

だからかな……悲しい夢を見たの――…。

麻希が居たの。
笑ってて、お父さんとお母さんも居て、三人は笑ってあたしに手を振ってくれた。

嬉しくて、みんなの所に行こうとしたのに…。

足が動かなかった。

ふと後ろを見ると、…十夜と旒來さんが立っていたの。

二人も笑ってた。

笑って…遠ざかって行く。

嫌だ…行かないで。

あたしを置いて行かないで。

待って…！十夜！！旒來さん！！

麻希よりも、お父さんとお母さんよりも…側にいたい。

どうしてなのかな？

こんなに大事だと思ったのは初めてで…。

あたしは麻希達よりも、十夜達といたいって思うの。

だから……麻希、お父さん、お母さん。

ごめんね――…。

――…

「――……」

体がだるい…ボーッとする…。

あたし……。

どうなったの？

目覚めて最初に目に入ったのは、高級そうな天井。

見た事ある。
此所はあたしの部屋だ。

帰って来たんだ。
良かった…。

でも…待って。

体が動かない。指一本すら動かせない。

どうして…。

「亜子…」

優しい声…。
あたしはこの声を知ってる。

……十夜…。

「亜子…目を覚ましたか？気分はどうだ？」

「…ぁ…動かない…体…」

「毒にやられたんだ。旒來が治療したから後は良く休めば治る。安静にしていろ」

毒？あぁ…だから体が動かないんだ。

喋る事もあまり出来ない。

あの魔物に針を刺されたから…。

そっか…。

十夜は優しくあたしの頭を撫でてくれる。

それが気持ち良くて…睡魔が襲ってきた…。

――――…

「…ん…」

また見た事ある天井…。

眠ってた。

十夜は居なくなってて、部屋にはあたし一人。

体は前より動いた。

起きよう…今何時か気になるし…。

あたしはゆっくりと起き上がり、ベッドから出た。

足がおぼつかないが、それでも前に進む。

窓にはカーテンがしてあり、退かしたら暗闇が見えた。

夜なんだ…。

どれくらい眠っていたんだろう。

みんな…何処？

扉に行こうと踵を返した時、白いものが目に入った。

「…包帯…手当てしてある…」

治療したのは旒來さんって十夜言ってたよね。

ありがとう旒來さん。

そしてあたしは部屋から出た。

廊下に出ると、しん…と静まりかえっていて、いつも居る見張りの兵も居なかった。
廊下には誰一人として居ない。

何か寂しい…。

十夜の部屋行こう。

あたしは途中何度も転びそうになりながらも、十夜の部屋へと向かった。

――――…

コンコンッ

静かな廊下の中に、乾いた音が響く。

「入れ」と言う声と共に、扉を開いた。

「十夜…」

キィ…という小さい音がして、少しだけ扉を開ける。

顔を覗かせる。

見えたのは…十夜の驚いた顔。

固まってあたしを見てる。

机に座ってて、沢山の資料を手にしている。

仕事中だったんだ。

邪魔しちゃった…。

出直そう。

「ごめん…邪魔しちゃって…また来るね、おやすみ…」

扉を閉めようとしたら、奥からガタッと音がして、また扉が開いた。

え…？

腕を引っ張られて、部屋の中へ入れられる。

バタンと扉が閉まる音がした。

あたしは…十夜の腕の中に居た……。

暖かくて、ホッとする。

この温もりは…あたし好きだ。

「馬鹿野郎！まだ完全に毒抜けてないんだぞ！？無闇に出歩くな！」

頭上から十夜の怒鳴り声が聞こえた。

怒ってる…だって一人は辛かったから…。

「ごめん…でも…一人は嫌で…それで……」

「……一緒に居てやるよ、一人にしてごめんな…」

「ん…」

体が震える。声が震える。

安心する…。

「俺のベッドで寝ろ」

そう言われてベッドまで連れて行かれた。

ベッドに寝かされ、十夜が横にあった椅子に座る。

あたしの髪を優しく撫でてくれている。

「……ねぇ十夜」

「どうした？」

「…あたしって…足手まといだよね…」

ぴた、と十夜の手が止まった。

眉間に皺を寄せてあたしを見てる。

怒ってる…睨んでる！
怖い！！

でも…言わないと。
本当の事言って、十夜の気持ちが知りたいから…。

「……そんな事考えてたのか、お前…」

一気に声が低くなった！！
めちゃ怒ってますよーっ！！

「だ、だって…」

はぁ…と、十夜のため息が聞こえてあたしは十夜の顔を見た。

「洙梨に何か言われたのか」

「ち、違っ…」

「分かりやすすぎ」

ピンッと額を十夜の指で弾かれた。

痛い…。

「ばーか。ンな訳ねぇじゃん」

「えっ…」

あたしは額を擦りながら答えた。

「俺も、旒來も、みんな…お前の事そんな風に思ってない。それは絶対だ」

十夜の真剣な瞳は、揺れていた。
煌めく光を纏って。

「洙梨に色々言われたんだろうが、気にするな。亜子は、俺達を信じればいいんだ」

また頭を優しく撫でてくれた。
その優しさに安心し、涙が滲んでくる。

「十夜…」

嬉しい…。
そう思われていた事が、すごく嬉しい。

…うん。
信じるよ、十夜達の事。
誰よりも…信じる。
疑ってごめんね。

「ごめんね…十夜…」

「いいって。もう不安じゃないか？」

「うん！大丈夫！」

あたしは満面の笑みで答えた。

十夜の顔が柔らかく微笑んだ。

そんな表情を見て、自分の顔が熱くなっていくのが分かる。

「っ…」

あたし……。

あたし、どうして？

十夜の微笑みを見た瞬間…顔が熱った。
何か照れちゃって、熱くなって…。

うぅ…十夜の馬鹿！
かっこ良すぎなのっ！！

†〜5〜†

「馬鹿…」

「えっ？」

「十夜の馬鹿！！」

「なっ…！？亜子！お前何だよ急に！！」

あたしは頭から布団を被った。

赤い顔を見られたくなくて…。

「何でもない…」

「何でもない訳ないだろ？ったく…とにかく寝ろ。朝になったら起こしてやるから」

十夜が椅子から立つ音がする。

思ったけど…十夜は何処で寝るの？
ベッドはあたしが使ってるし…十夜寝る場所あるの？

「ねぇ…十夜…」

「ん？」

あたしは布団から顔を出して、十夜を見る。

十夜は机の上に置いてある紙を見ていた。

「十夜…寝る場所あるの？ベッドあたし使ってるし…」

十夜があたしを見る。

軽く笑った。

な、何よぅ…。
心配してるのに…。

「平気だ、寝る場所ならまだある。というか寝れるのか？俺」

「えっ？…あ…仕事…」

「今日は多いんだよなー、徹夜かもな」

苦笑すると、机とペアの椅子に座った。

また仕事をし始めた。

忙しいんだな…皇子だもんね。

…寝よ！話しかけるのは悪いし。

「あっ亜子」

「うん？」

また十夜と目が合う。

十夜は何か小さい袋を持って、あたしの所に来た。

横にある椅子に座ると、持っている袋をあたしの前に晒す。

「これ…」

「街で買ったやつ」

「…ありがとう」

十夜から受け取り、袋から買ってもらったブレスレットを出す。

付いている宝石が、キラキラと輝いている。

とても綺麗で…自然と顔が綻んだ。

「ありがと…十夜」

笑顔を十夜に向ける。

十夜は微笑すると、あたしの頭を撫でてくれた。

「いーえ。もう寝ろよ」

「うん…おやすみ十夜…」

「おやすみ」

十夜は微笑んだまま椅子から立ち上がり、奥へと消えていった。

あたしはブレスレットを眺めていたが、激しい睡魔が襲ってきたので、ブレスレットを腕に付けて深い眠りについた……。

――――…

陽が昇り始める頃……。

ある二人の男女がナルスト国へ続く道を歩いていた。

薄紫色の髪の男と、艶やかな黒髪の女…。

二人はただ静かに歩いていた……。

「……逢ったら、どうしよう…ねぇ？」

女が男の顔を覗き込む。

男は女を一瞬見ると、また視線を前へと戻した。

「ふふっ…驚くよね。まぁでも…真実だから――…」

女は妖しく微笑むと、男の腕を掴んで歩き出した…。

そのまま二人は消えていった……。

†第七話　近づく暗闇　～1～†

「んんーっ！良く寝たー！」

あたしは十夜のベッドの上で大きい伸びをした。

辺りを見てみると、十夜の姿は無かった。

奥で寝ているのか、それとも起きて何処かへ行ったのか。

とにかくもう体はだるくなかったので、ベッドから起き上がった。

壁に掛かっている時計を見ると、時刻は8時を指していた。

「…お腹減った…」

そう言えば昨日の夜から何も食べてないんじゃないの？

自分の部屋に戻ろ…。

あたしは扉に向かい、小さい音をたてて扉を開けた。

「あっおはようございます亜子様」

「おはようございます」

「お、おはようございます」

部屋の前には見張りの兵が二人立っていた。

軽い挨拶をして、自室へ向かう。

「体が治って良かった…旒來さんには感謝だね。会ったらお礼言わないと」

歩きながらそんな事を考えていると、前方に旒來さん発見！

ナイスタイミング！

「旒來さん！！」

あたしは大声で旒來さんを呼んだ。

気づいた旒來さんはこちらに振り向き、優しい微笑みを向ける。

旒來さんはあたしの前まで来ると、軽く礼をした。

「おはようございます亜子さん。気分はどうですか？」

「もう大丈夫だよっ！治療してくれたのは旒來さんなんだってね！ありがとう！！」

「いいえ、治って良かったです。これからどちらへ？」

「部屋に戻って朝食食べたいです。お腹減っちゃって…」

言いながらあたしはお腹を擦る。

旒來さんはクスクス笑った。

「では諷羅を呼びますね。部屋で待っていてください」

「はぁい。あっあの十夜は何処へ？」

「十夜なら仕事を片付ける為に書庫へ行きましたよ」

「書庫？書庫なんてあるの？」

「はい。そういえばこの城を案内していませんでしたね、今度案内しましょうか」

「はいっ！！」

書庫なんてあったんだなぁ。
ほんと、知らない事多いや。
案内してくれると嬉しいかも！

「では後程」

「はいっ！」

そう言ってあたし達は別れた。

あたしは部屋へと向かう…。

――――…

部屋へ入って、明るく光っている窓を開けた。

鳥達が鳴いている。

風も吹き、頬に触れて涼しい。

「気持ち良い…」

そういえば…最近闇の人達来ないな。

いや！平和だから良いんだけどねっ。

でも……なんだろう。

胸騒ぎがするんだよね。

ざわざわする感じ。

何も無いといいけど…。てかお腹減ったよー…。

諷羅まだかな…。

そう思い、扉の方を見た瞬間……。

ザアッ…！！

「わっ！何？凄い風っ…」

強風が吹いた。

強すぎて亜子の髪が靡く。
部屋にある物も強風によって動いている。

その風は生きているかのように収まらない。

「もっ…何なのっ？」

収まらない風に苛ついて窓を閉めようと手を伸ばした時……。

ドゴオォンッ！！

「…！！なっ…！？」

其処から見えていた街の一部が爆発した。
赤い炎と黒い煙が見える。
人々の叫び声が聞こえる。
亜子の胸が波打った。
激しい心臓の音が耳に届く。

「何で…何が起こったの…！？」

状況についていけない亜子は、ただ呆然と燃えている街を見ている
しかなかった…。

「亜子っ！！」

部屋の扉が激しく開かれ、諷羅が入ってきた。

しかし亜子の耳に諷羅の声は届かず、窓の外を見ているだけ。

諷羅は不審に思い、亜子の肩を掴んで自分の方へと向かせる。

「亜子！！どうしたの！？亜子っ！！」

「――……」

「亜子っ！！！」

「！！あっ…あたし…」

諷羅の大きすぎる声によって意識を取り戻した亜子は、また窓の外を見つめた。

街は燃えさかっている。

「何で…」

「亜子、その事なんですが…」

諷羅が話そうとした瞬間。

ゴオッ…！！

「「きゃああっ！」」

また強い風が吹いた。

それは二人を飲み込むように吹き続けている。

「なっ…これは…っ」

「っ…！」

亜子は風に対抗し、勢いよく窓を閉めた。

バタンッと強い音が鳴ったと同時に、吹き荒れていた風が止んだ。

部屋は強風のせいで荒れた物が広がっている。

「はあっ…はっ…」

「亜子…これは一体…？」

「分かんない…窓を開けたら強風が吹いて、それで街が爆発して…。…！！街はどうなったの！？ねぇ！！」

亜子が諷羅の肩に手を置いてグラグラ揺らす。

「亜…子っ落ち着いてくださ…」

諷羅の目が回っていく。
それに気づいた亜子はすぐに手を放した。

「あ…ごめん…」

「いえ…」

諷羅は服の乱れを直すと、まっすぐに亜子を見つめた。

「亜子、何らかの理由で街が原因不明の爆発を起こしました。城に居た兵達と十夜様、旒來様が街へ向かいましたので、亜子は…」

「原因不明の！？」

「はい。今十夜様のお父様とお母様が原因を調べています。ですから亜子は今…」

「やっぱり…あの胸騒ぎはこれを知らせる為に…？」

てことは…あの爆発はもしかしたら…。

……闇の仕業！？

強風も…でも何の為に？

意味分かんないしっ…！

「亜子？どうし…」

「諷羅！！」

「はっはい！」

諷羅の目の前に亜子のドアップの顔が迫る。

少し後ずさってしまう。

「亜子…？」

「爆発とさっきの強風はもしかしたら…闇の仕業かもしれない！！」

「え…闇の？」

「まだ分からないけど…何となくそんな気がするの。だから早く十夜にっ…」

「へぇ…さすがだね」

えっ…？

後ろから聞いた事のある声がした。

諷羅は目を見開いたまま固まっている。

亜子はゆっくりと後ろを振り返る。

其処に居たのは……。

窓の前に立っている…いつか見た男の子だった……。

†〜2〜†

「――…さすが選ばれし少女だね、闇って気づくなんて」

静かな空間に、幼い声が響く…。

亜子と諷羅は固まったまま動く事が出来なかった。

黙って男の子を見ている。

「でももう遅いよ、僕達…動き出しちゃった」

男の子がそう言った瞬間……。

男の子の周りに黒い風が吹いた。

それは段々と濃くなっていき、闇よりも深い色になっていく。

風も強くなっていき、吹いている範囲が広くなっていく。

男の子は楽しそうに笑っている。

子供が何かで遊んで笑うような笑顔だ。

その笑顔は今は、不気味すぎる程だった。

闇と溶け込むように…微笑みは妖しさを増していく…。

「――――…亜子…」

ビクッと亜子の肩が震えた。

男の子はニヤリと笑うと、その場から消えた。

「!?消えたっ…!」

そう言ったと同時に…、亜子の目の前に男の子の顔が広がった。

速すぎて言葉が出なかった。

「……ねぇ…言ったよね?ちゃんと…」

ツウ…と頬を手でなぞる。

体が小さく震えた。

男の子は亜子の耳に唇を近づけ、囁いた。

「気をつけて…って…」

「…!!」

亜子は瞬時に体を離そうとしたが、男の子の左手が腰にまわって、動く事を許してくれない。

空いた右手は亜子の顎を捉えた。

…いつだろう。

あの月が綺麗な日に、見たものと同じ…。

紅い瞳――…。

妖しい輝きを放った紅い瞳が近づいてくる。

やばい……。

本能がそう思った。

でも体は動いてくれない。

咄嗟に頭に浮かんだ名前。

すぐ近くに居る知り合いに助けを求める。

「……諷…羅……」

横目で隣に居る諷羅を見ると…。

……倒れていた。

「なっ…！何でっ…！」

「あぁ…」

気づいた男の子は諷羅に目線をやる。

「だって僕亜子しか要らないから、邪魔だし眠らした」

「なっ！？ちょっと！！何してんのよっ！！」

「だって絶対邪魔するじゃん。だから」

「だからって…！！」

亜子が反論しようとしたら、強く頭を引かれた。

「僕は亜子しか欲しくないから、それに……」

男の子の瞳が変わった。

鋭さを醸し出している。

いきなりの豹変ぶりに体が硬直する。

「…会ったんでしょ？あいつに…」

「あいつ…？」

あいつって誰？誰の事言ってるの？

「犖欹（らくい）に…」

「犖倚…？」

「僕と同じ紅い瞳をした男だよ」

紅い瞳をした男……。

……あの変態野郎の事か。

「…会ったけど…それが？」

「あいつもこうやって亜子を求めたんだ？」

まわされている手に力が籠った。

「ちょっ…離して！！」

そんな事言っても離してくれる訳なく、余計に力が籠ってしまった。

「あいつも欲しいって言ったでしょ。やだな…亜子は僕のものなのに…」

「あたしは誰のものでもないからっ！！離してよ！！」

「……紘（ひろ）」

「えっ？」

「僕の名前、覚えて？」

「……紘…」

「良く出来ました…っと…」

紘の動きが止まった。

横目で紘の首辺りを見ると其処には…。

銀色に輝いた剣の剣先が、紘の首にあと1ミリという所で止まっていた。

あたしはそれを見た瞬間、唾を飲み込んだ。

「――…亜子から離れろ」

いつもとは全然違った低い声が耳に届いた。

いつの間に来たのだろう。

分からなかった。

「十夜……」

紘の隣には、銀色の髪で、何処までも深い青色の瞳を鋭く光らせた……十夜が立っていた……。

†〜3〜†

長い…長い沈黙が流れたと思う。

あたしにはそう感じた…。

「あ〜あ、もう少しだったのに…」

「黙れ、亜子から離れろ」

「十…」

十夜の名を呼ぼうとしたが、あまりにも十夜の瞳が鋭くて、怖くて言葉が出なかった…。

怖い……こんな十夜は今まで見た事がなかった…。

「ちぇっしょうがないか。じゃあ…」

スル…と紘の腕が亜子から外れた。

紘は数歩後ずさったが、まだ十夜は紘に剣先を向けたままだ。

十夜が亜子の前に立つ。

亜子は黙って十夜の背中を見ていた。

「……十夜…ね」

小さく紘が呟いた。

十夜の肩がピクリと動いたのを亜子は見逃さなかった。

しかし疑問も浮かぶ。

…紘、十夜の事知ってたの？

闇でも…仲間だから？

しかし亜子のそんな思いは、次の紘の言葉によって粉々に砕けてしまう。

「僕は…お前を仲間だとは思わないからな」

「え…」

「あの人はそう思ってるかもしれないけどっ僕は違う！！犖欹も…他の闇の奴等もみんな…お前達なんか大嫌いだっ！！！」

紘の悲痛な叫びと共に、紘自身は自らが生み出した闇の空間へと消えていった…。

紘が消えた場所に瞳を向ける。

其処から見えた外の景色。
赤い炎も黒い煙も無かった。

街は無事のようだ。

そう思ったら安堵のため息が溢れた。

「良かった…」

嬉々の言葉と共に……。

言い終わった瞬間。

何かに体を抱き締められていた。

……え…。

十夜…？

首に十夜の髪がかかった。
くすぐったい…。

「亜子――…」

十夜の抱き締めてる腕に力が籠る。

少し震えていた。
十夜は…。

だからあたしは……。

精一杯の強さで十夜を抱き締めた……。

十夜もそれに応えるように、もっと強く抱き締める。

二人はそれから数分間、互いの存在を確かめるように…強く…強く抱き締め合った――――。

――――…どれくらい時間が経ったのか、気がついたら十夜の瞳があたしの目の前にあった。

深すぎる青。
その色は何処か…悲しみを含んでいるようだった。

それが段々と近づき、そして…。

また抱き締められる。

あたしもそれに応える。

暖かい…。

十夜の温もりは本当に安心するの。

十夜……。

「助けてくれてありがとう……」

「あぁ…」

耳元に十夜の吐息がかかった。

また……強く抱き締め合う。

長い時間……。

永遠と感じるだろうそれを、亜子は自分の体に染み込ませるように……。

きつく十夜を抱き締めた。

†第八話　想い伝えたい　～1～†

街は…十夜や旒來さん、それから城の兵達によって、被害は少ないものとなった。

燃えた所の復興は必要だけど、被害が少ないと聞いて本当に嬉しかった。

原因は……闇の仕業。

紘の他にも闇の奴等は居たらしく、しかもたったの三人。

三人…紘を入れて四人のせいで街は崩れてしまった。

闇の力は強力だと…改めて思い知った。

そして闇は……あたしを欲している。

それは何でか分からないけど、きっとあたしの力が必要なのだろう。

あたしの力が必要だからって、それだけで何で街をあんな風にするの？

関係ない人達を巻き込むの？

許せなかった。

闇を…許せなかった。

憎しみが……あたしの心の中に生まれたの。

こんな激しい憎しみを持ったのは初めてだよ。

今度会ったら、絶対に許さないから。

あたしだって戦うから。

闇なんかに…負けないんだから――…。

――…

「諷羅……気分はどう？」

「はい……大丈夫です。すいません…看病してもらって…」

「全然いいよ！てか紘の奴…何が眠らしただっ！毒粉なんか撒いちゃってさっ！！もう少しで諷羅が死ぬかもしれなかったんだぞっ！！まったく…」

フフッと諷羅が微かに微笑した。

その微笑みが綺麗で、あたしも微笑んで諷羅の頭を撫でた。

「私は良いんですよ。亜子が無事で良かった…」

「十夜が来てくれなかったらやばかったね。でも諷羅の方がやばいんだからねっすぐに旒來さんに治療してもらったから良かったけど…、もう少し遅かったら…」

亜子の瞳が潤んだ。

その瞳を諷羅は見つめて、また微笑する。

「私は亜子に何もなければ良いんです。本当に…無事で良かった…
…亜子……」

「諷羅……」

あたし達は一瞬見つめ合うと、また微笑んだ。

――――…

「寝ちゃった…」

諷羅が寝たのを確認すると、あたしは椅子から立ち上がった。

扉に向かい、なるべく音をたてないように部屋から出る。

長い廊下を歩いて、ある場所へ向かう。

其処は…街が一望出来る場所……。

――――…

「はぁ…」

短いため息を吐き出して、街を眺める。

街は復興の為に慌ただしかった。

十夜と旒來さんも復興を手伝っている。

あたしも手伝いたいと言ったら、十夜に駄目と言われた。

危ないからだそうだ。

危なくないのにね。
心配してくれてるんだけど。

だからあたしは此所から見つめるだけ。

見守るだけ…。

「――――……」

微かだが風が吹いた。

あの時のように頬を掠める。

優しく……亜子を包んだ。

まるで…十夜に抱き締められてるみたい。

優しく…けれど強く…。

安心する……。

その中で亜子はゆっくりと瞼を閉じた……。

ブー…ブー…

「！！」

突然の振動によって亜子は瞳を開ける。

制服のポケットが震えている。

もしかしてこれは…！！

亜子はすぐさまポケットに手を入れて、振動している物を手に取る。

携帯が震えていた。

ディスプレイを見ると、着信で麻希から。

亜子は驚きと喜びの表情を作ると、携帯を開き通話ボタンを押した。

「麻希っ！！」

大好きな親友の名を呼ぶ。
瞳には涙が浮かんでいた。
「やっと繋がったあ！！亜子無事！？」
麻希の安堵した声が聞こえた。
「麻希ぃ…！」
久しぶりに聞いた親友の声に、涙腺が緩み、涙が溢れてしまった。
「えっ？泣いてんの亜子」
「うぅぅ…麻希ぃぃ…」

「ちょっと亜子…落ち着いてよっねぇ…」

それから数分間、麻希は電話で亜子を宥め続けた。

――――…

「で、亜子さ…あんた今何処に居るの？」

「えっ…」

麻希の宥めによって、やっと普通に話せるようになった亜子に、容赦なく麻希が聞いた。

亜子は一瞬固まる。

…言っていいの？
言ったら信じてくれるの？
異世界の事…信じる？

「ずっと学校来ないでさぁ、みんな心配してるよ？家に行っても鍵かかってるし。何してるの？」

「……」

…家…。

お父さん、お母さん…。

みんな…心配してる。

ごめん…。
でもあたしは帰れない。

此所でやる事があるから。

けど……おかしい。

お父さんとお母さんはどうしてみんなに何も言ってないの？

大事にしたくないのかな。でも麻希には言うよね、普通。

しかも娘が居なくなったら警察とかには言わないの？

どうして…？

「亜子ー？」

「…あっごめん！えと…」

……言えない。

言えないよ。ごめんね…麻希……。

「ごめんね…またかける！じゃあね！！」

「ちょっと亜子…！？まっ…」

あたしは麻希の言葉が言い終わらない内に電話を切った。

携帯を両手で握り締める。

「……ごめん…」

あたしは…それしか言えない――。

……そんな亜子は、気づいていなかった。

亜子の後ろに……、切ない表情を浮かべて亜子を見つめている十夜の存在を……。

†〜2〜†

街が原因不明の爆発を起こした。

急いで被害の遭った場所まで向かうと、闇の力の気配がした。

それには旒來も気づいたらしく、俺は胸騒ぎがした。

亜子の元へ行きたかったが、こんな状態の人々を放っておけなかった。

苦しかった。

一番大切な人を護りたかった。

そんな時、旒來の声が聞こえた。

「亜子さんの元へ行ってください」

…と。

俺はその言葉に甘え、亜子の元へと走った。

亜子が居る場所からも闇の力の気配がして、焦った。

だから俺は近道をしたんだ。

窓からの侵入。

俺は持ち前の運動神経で軽々と木に飛びつき、窓を開けた。

すると目の前には……。

闇の奴に襲われている亜子が目に入った。

その時……。

俺の中で何かが切れたんだ。

気配を消し、男に近づく。

気づかれずに男の近くまで来れて、俺は拍子抜けした。

そしてそのまま剣先を男の首に当てる。

そこでやっと気づいた男は、亜子から離れた。

良かった…間に合った。

心底ほっとした。

しかし横目で辺りを見回せば、亜子の隣で諷羅が倒れていた。

それにこの匂い…毒か。

そう悟った俺は、亜子も毒にやられてないか心配になった。

急いでこいつを片付けないとと思った。

そうしたら男は叫び声を上げ、そのまま消えていった…。

男の叫びなど気にせず、俺は亜子の方へ振り向き、力いっぱい抱き締めた。

お前が壊れるんじゃないかって思うくらい強く…。

無事で良かった…。

……大切なんだ。

亜子が。

誰よりも、亜子が大切なんだ。

頼むから……消えないでくれ。

泣きそうになるのを堪えて、俺はもっと強く亜子を抱き締めた。

亜子の体は小さくて、俺の腕にすっぽり入っちまう。

儚くて、脆い……。

――護りたい。

亜子を…何がなんでも護り通す。

心の中で誓った――。

それから長い時間、亜子と抱き締め合った。

永遠にも似たそれに、俺はいつまでも浸っていた。

亜子……。

俺の前から…いなくならないでくれな。

離したくないから。

ずっと此所に居てくれ…。

――――…この感情を俺は知ってる。

知ってるけど、これは駄目だよな。

持っちゃいけないんだ。

だって亜子…お前は全てが終わったら、……帰るんだろ？

自分の世界に…なぁ。

辛い…もう失いたくないのに、また失う。

そんな思い…懲り懲りだ。

だから……今は秘めておく事にしよう。

まだ伝えない。

伝えたいけど…伝えない。

だから亜子……今は俺の側に居てくれ――…。

まだ……消えるな――。

亜子――…愛しいよ……。

俺は亜子の背中を見つめながら、想いを胸の中にしまい、そして…

…切なくなった――――…。

†〜3〜†

「5日間此所を空ける？」

「あぁ。祖父に会いに行かないといけなくなったんだ。手紙が来てな」

あの騒動から一週間。
城の人達は街の復興で慌ただしかった。
しかしそれも一週間で終わり、やっとみんな…十夜も休めると思ったんだけど……。

十夜のお爺ちゃんから、手紙が来た。
今までの事、そして闇の事について詳しく話したいらしい。

だからまた十夜は忙しくなる。
5日間此所を空けて、お爺ちゃんに会いに行くんだそうだ。
もちろん十夜の側近の旒來さんも。（今分かったんだよ！旒來さんが十夜の側近だって！！）

「疲れてない？復興作業忙しかったじゃん」

十夜は人一倍働いたと思う。
睡眠もろくに摂らないで、いつも復興作業をしていた。
だから絶対疲れてるのに…。また遠出をしなきゃいけないなんて、大変すぎるよ…。

「あぁ…確かに疲れてるけど…平気だ」

「……皇子だからって、弱音吐いちゃ駄目って訳じゃないんだよ？」

十夜は我慢してる。
みんなが見てない所で、苦しそうな表情をしてるのあたし知ってるよ。

十夜は柔らかい微笑みを向けると、椅子から立ち上がり窓のある場所へと移動した。

夜空を見ながら、言う。

「そうだな。でも俺は…みんなの為なら何でもしたいって思うから。辛い時もあるけど……弱音吐いてる時なんかないんだ」

月の光に照らされた十夜の顔は、憂いを帯びていて、切なく見えた。

「じゃあ……弱音吐きたい時になったらあたしに言ってね！あたしは聞くから！！十夜の弱音！！いつでも頼ってよっ！！」

亜子はガッツポーズをして笑うと、十夜はそんな亜子を見て、目を細めて優しく笑った。

「ありがとう、亜子…」

「いいえ！！」

だから…辛い顔はしないでね。十夜……。

次の日、十夜と旒來さん、少数の兵達は、十夜のお爺ちゃんの元へと旅立って行った……。

そして十夜から聞いた事。
またいつ闇が襲ってくるか分からないし、あたしを一人にすると危ないから、別の守護者を側に置くみたい。

水の力を得意とする守護者。
十夜の幼なじみなんだって。明日会う約束をしてるんだけど…。
どんな人なのかな。
会うの楽しみ！！

亜子はその夜、胸を弾ませながら眠りについたとか。

翌朝……。

亜子はいつもより早く目を覚まして、支度をし、いつでも会いに来て良いように準備をした。

そして時刻が9時を回った頃……。

「亜子、失礼します」

諷羅の声が部屋の扉の向こうから聞こえた。

「はぁい」

軽く返事をして、走って扉に向かう。

ドアノブに手を掛けて、視界に諷羅が映った。

それと…諷羅の後ろに居るスカイブルーの髪をした男の人も。

もしかしてこの人が…十夜の幼なじみ？

水の力を持った、守護者……。

「亜子、鳴巳（なるみ）様が参りました。ご挨拶を」

諷羅は後ろに居る男の人を前に出すように、自分が下がって男の人を前に出した。

見えたのは……とても綺麗な男の人。
髪の毛の色、スカイブルーが映えてとても綺麗だった。
もちろん顔立ちも。
よく整っていて、十夜や旒來さんみたいに美形だった。
つい魅とれてしまうくらい綺麗な人。

「亜子様、水の力を得意とする守護者…鳴巳です。はじめまして」

スッ…と右手を胸の辺りまで持ってきて曲げると、お辞儀をされた。

慌ててあたしもお辞儀をする。

「は、はじめまして！亜子ですっ！今日からよろしくお願いします！！」

すごく大きい声だったのだろう。
鳴巳と諷羅は目を大きく見開いて固まっている。
亜子は、はは…と乾いた声を漏らした。

――――…

「亜子様は元気な方ですね。びっくりしました」

「いやっあれはその…てか様いりません！どうぞ呼び捨てして下さい！！」

「え？」

様付け嫌いだしっ是非名前で呼んで欲しいよ！こんな美形さんには！！

「それじゃあ…敬語も無しで」

「…えっ？」

意外な言葉に亜子が固まる。

敬語無しって…まさか鳴巳君から言ってくれるなんて…。

嬉しい！！

「うん！！敬語無しで呼び捨てねっ！！」

「じゃあ改めてよろしく。亜子」

鳴巳が亜子に手を差し出す。

「よろしくっ鳴巳君！！」

差し出された手を、あたしは強く握った。
それから、亜子の部屋で話は弾む…。
気がつけば、もう陽は沈みかけていた。

「もうこんな時間か…早いなぁ、時間が過ぎるのは」
「そうだね。それじゃあ亜子、俺はこれから用事があるから。少し出てくるよ」
「あっうん。じゃあまたね」
「すぐ戻ってくるから。その後に、亜子についてきて欲しい場所があるんだけど。来てくれるか？」
「え？…うん、良いよ」
「良かった。それじゃあまた来るから」
そう告げると、鳴巳君は部屋から出ていった。
あたしは夕日色の窓を見つめて、鳴巳君が言った事を考える。
「ついてきて欲しい場所って、何処だろ…。まぁいっか、すぐに分かるもんね」
亜子はベッドまで近寄り、勢いよくダイブした。
ふかふかのベッドが、亜子の眠気を誘う…。
すぐに亜子は、深い眠りへと堕ちていった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4298c/

blessing

2010年10月17日09時59分発行